

三省堂 高校英語教育

2018年 夏号

巻頭エッセイ

国を捨てる学力 平田 オリザ …… 1

特集1 新「大学入試」に向けて

- 新「大学入試」とこれからの授業 根岸 雅史 …… 2
- 新「大学入試」とWriting指導 今井 理恵 …… 6
- 新「大学入試」とSpeaking指導 和田 順一 …… 8
- 新「大学入試」と語彙指導 横川 博一 …… 10



特集2 教科書(改訂版) Part 3

- 『CROWN English Communication I・II・III New Edition』-「思考力・判断力・表現力」養成のための提案- 霜崎 實 …… 12
- 『MY WAY English Communication I・II・III New Edition』の編集方針 -「III」の応用・発展と題材内容を中心に- 森住 衛 …… 15
- 『VISTA English Communication I・II New Edition』-「民間試験」への移行を見据えて- 金子 朝子 …… 18
- 『CROWN English Expression I・II New Edition』-Scaffoldingという考え方に支えられて- 松原 好次 …… 20
- 『MY WAY English Expression I・II New Edition』-「大学入学共通テスト」に対処する授業の展開方法とテクニック- 飯田 毅 …… 22
- 『SELECT English Expression I New Edition』-「4技能試験」を見据えて- 井上 徹 …… 24
- 『SELECT English Conversation』-「英語会話」とこれからの「新大学入試」- 北出 亮 …… 26



2018年度センター試験の分析と対応 渡辺 聡 …… 28
オハイオ便利 Brian Wistner …… 表紙裏
表紙写真について 飯野 厚 …… 表紙裏

これからの時代の英語語彙学習に最適!

クラウン

発信力をアップさせる新世代の英単語帳

チャンクで英単語 Basic・Standard・Advanced

東京外国語大学教授
投野由紀夫 編



Basic
288頁 定価(本体750円+税)

Standard
336頁 定価(本体840円+税)

Advanced
408頁 定価(本体1,000円+税)

2色刷・B6判



チャンク学習で
4技能を
飛躍的にアップ!

チャンクで覚えれば、そのまま英作文や英会話に役立ちます。一つひとつの単語をより確実に覚えられますので、リーディング力ももちろんアップ。

発信力を高める
2ステップ!

チャンクからセンテンスへ、2ステップの学習で、着実に発信力を高めることができます。

充実の単語情報!

フォーカスワード・単語コラム・多義語など、単語情報が満載。楽しみながら英語の理解を深めることができます。

◆赤シート付き ◆音声無料ダウンロード(別売音声CDもご用意)

エースクラウン英和辞典 第2版

英語の基礎をしっかりと定着

- フォーカスページで最重要58語を攻略し表現力を育てる
- CEFR-J対応ロゴ・中高教科書ロゴで覚える単語がわかる
- カナ発音・和英小辞典・基礎英文法付きで初級者も安心

投野由紀夫[編]

B6変型判 1,904頁

2色刷 定価(本体2,700円+税)



三省堂 高校英語教育 2018年 夏号

●発行 2018年6月15日

●編集・発行人 北口克彦

●発行所 株式会社三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町 2-22-14

電話 03(3230)9411(編集)・9412(営業)

●イラスト 只見 優佳(ただみ ゆか)

●表紙デザイン 株式会社キャデック(井上 登志子)

●印刷 三省堂印刷株式会社

〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9

電話 042(645)6111(代)

★三省堂教科書・教材サイト

<http://tb.sanseido.co.jp>



国を捨てる学力

劇作家・演出家・青年団主宰

平田 オリザ



© T.Aoki

かつて、東井義雄という教育者がいた。

彼は、高度経済成長のまったただ中の昭和四〇年代に「村を捨てる学力、村を育てる学力」という概念を提唱し、一介の教師でありながら当時の文科省の教育方針に一石を投じた。このまま、いわゆる「学力」だけを伸ばそうとしても優秀な子どもたちほど東京に出て行ってしまい、村は瘦せ細るばかりだ。もっと共同体を豊かにする教育に、その質を切り替えるべきではないかというのが東井の主張の中核であった。

東井は兵庫県北の但馬の地で生まれ、姫路の師範学校で学んだのち、再び但馬に戻り、この地を一步も離れることなく教員生活を送り、そしてこの地で一生を終えた。

但馬地方の中心である豊岡市では、今年度（二〇一七年度）から演劇的手法を使ったコミュニケーション教育を、市内三九のすべての小中学校で実施している。この実施までに三年をかけ、五つのモデル校を定めて私が直接授業を行うとともに、夏休みの研修会などでも一般教員が無理なく演劇教育が行えることを主眼とした講習を繰り返してきた。

二〇一七年度は、豊岡市教委にとって小中連携プログラムの完成年度でもあった。コミュニケーション教育は、ふるさと教育、英語教育と並んで、そのプログラムの核となっている。もう少しだけ詳しく書くと、小学校一年生から四年生までを前期として、ここではコミュニケーションの基礎体力とも呼べる「挨拶」や「聞く力」などの基礎力を鍛える。小学校五年から中学一年までの中期は、協働性を重視し集団で行うパフォーマンスが個別でやる作業よりも高い成果を上げるような体験的な学習を全教科を通じて意識的に行う。中二、中三の後期には、さらに「誰に伝えるか」を意識したプログラムを組む。私は、市の文化政策担当参与として、この改革全体をサポートしてきた。

英語教育でいえば、豊岡市は全中学校にA L Tを配置するほか、幼保からネイティブの英語に触れる機会を多く用意している。

しかし私は「豊岡の英語教育は、文科省が謳うようなグローバル教育ではない」と公言してきた。豊岡の英語教育は「世界で活躍する人材を育成するための教

育」ではなく、豊岡そのものを国際化するための教育だ。相手を論理で打ち負かすディベート型ではなく、異なる価値観、異なる文化的背景を持った人々の文脈を理解する対話型の教育と言い換えてもいい。

たとえば、先に掲げた「コミュニケーション教育」を「ふるさと教育」「英語教育」と連動させて、子どもたちがそれまでに習った英単語を織り交ぜながら外国人観光客を道案内するといった授業プログラムも実施している。ここでは正しい英語を使うことが目的ではなく、どうすれば、海外から来てくれた観光客に自分の気持ちが伝えられるかの工夫が評価される。

いま文科省が進める「グローバル教育」は、「国を捨てる学力」のようにしか思えない。おそらくこれは、現在の財界からの要請なのだろう。だとすればそれは、教室の三九人を犠牲にして、一人のユニクロシंगाポール支店長を作るような教育だ。教育工学的に見ても効率が悪く、しかも獲得目標が低い。さらにこのような教育を進めていけば、当然、残りの三九人はグローバル化から取り残され、偏狭なナショナリスト予備軍になっていく。誰のための何のためのグローバル教育なのか。

「国を捨てる学力」から「自立した市民を育てる学力へ」そして、そのための英語教育へ、教育の意味が一層問われる時代となる。

profile

劇作家・演出家・青年団主宰。

こまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセンター芸術監督。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。1998年『月の岬』で第5回読売演劇大賞優秀演出家賞、最優秀作品賞受賞。2002年『上野動物園再々々襲撃』（脚本・構成・演出）で第9回読売演劇大賞優秀作品賞受賞。2002年『芸術立国論』（集英社新書）で、AICT評論家賞受賞。2003年『その河をこえて、五月』（2002年日韓国民交流記念事業）で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。2011年フランス国文化省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。

新「大学入試」とこれからの授業

東京外国語大学大学院 根岸 雅史

1. 大学入試改革の概要とその背景

大学入試は大変革を迎えようとしている。この大改革は、大学入試システム全体の改革で、「学力の3要素（① 知識・技能、② 思考力・判断力・表現力、③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）」について、多面的・総合的に評価する入試に転換しようとしている（ただし、本稿の情報は2018年3月28日現在のものである）。2020年度に「大学入学共通テスト」が開始、2024年度には新学習指導要領を前提に更に改革する計画となっている。

このうち、とりわけ英語は大きな改革となる。これまでの「読む」「聞く」の2技能評価から、4技能評価への転換である。この転換は、外部試験を活用することによって行われようとしている。大学入試センターが、試験の内容と実施体制を評価し、入学者選抜に適した試験を認定し、その結果を各大学の判断で活用する。共通テストの英語試験は、認定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、2023年度までは継続して実施の予定である。

今なぜ4技能なのか。実は、日本の学習指導要領は以前より4技能を指向してきたし、「訳読」や「文法・語彙」の指導だけでいいとしてきたわけではない。にもかかわらず、これまでの多くの高校英語教育が「訳読」と「文法・語彙」中心であったことは認めざるを得ないだろう。その原因は、大学入試だ。大学入試に「和訳問題」や「英訳問題」「文法・語彙問題」が出るから、それを指導する。ある意味、整合性のある話だ。

日本では、「英語」は大学入試における「主要科目」とされる（ちなみに、これは世界中同じということではない）。大学入試の「主要科目」である「英語」の対策をしてくれるのであるから、大学に行きたい生徒はこうした授業には感謝するだろう。

しかしながら、世の中の学校英語教育に関する満足度は、絶望的に低い。2012年の楽天リサーチ株式会社の「日本の英語教育に関する調査」によれば、学校英語教育には9割近くの人々が「不満」としている。昔は「英語」を学校で習っても、受験以外で使うことはほとんどなかった。ところが、今日では、海外渡航者数や訪日旅行者数が激増しているために、学校で習った英語が使えるかどうか、白日の下にさらされてしまう。

こうした状況を打開するために、これまでに数え切れないほどの英語教育改善のための施策が打ち出されてきた。たとえば、「文法」という科目は、とうの昔（正確には、1982年）に学習指導要領から消えている。1994年には「オールコミュニケーションA、B、C」という科目が導入された。2009年には「英語の授業は英語で」という方針が学習指導要領に明記された。これらの施策が指向していたものは、1998年の学習指導要領のキーワードである「実践的コミュニケーション能力」の育成と言えるだろう。しかし、これらは、大学入試のための英語教育という名目のもとことごとく跳ね返されてきた。

だから、もう大学入試を変えるしかないと考えたのだろう。その意味では、今回の大学入試改革は、日本の高校英語教育への最終メッセージと言ってもいい。

2. 変貌するセンター試験：共通テスト

2020年度より大学入学共通テストが大学入試センター試験に取って代わる。これまでのセンター試験は一定の評価を得てきたが、新しい学力観に照らすと測定対象が知識に偏りがちであったとされる。そこで、共通テストは「思考力・判断力・表現力」を測ることとした。国語や数学で記述式問題が出題されようとしているのはそのためである。



ただし、英語の場合は、状況が複雑だ。というのは、4技能化を図るプロセスで、英語は大学入試センターが4技能型の試験を開発・実施するのではなく、外部試験を利用するという決定を下した。また、少なくとも2023年度までは共通テストでも「英語」の試験が続く。

この決定の是非は別にして（個人的には、今でも大学入試センターが主導して4技能型のテストを開発・実施すべきであると思うが）、認定試験を利用して「スピーキング」や「ライティング」が測定されることとなった。共通テストでは「思考力・判断力・表現力」を測ることを目指しているが、認定試験で「スピーキング」や「ライティング」という「表現力」を測るために、共通テストの「英語」では、「リーディング」「リスニング」のテストで「思考力・判断力」を測ることになる。つまり、「スピーキング」「ライティング」のテストを認定試験に譲ったことで、共通テストの「英語」は「思考力・判断力・表現力」らしさを「リーディング」「リスニング」のテストで出さなければならなくなったということである。

今年の2月から3月にかけて行われた「英語」の「試行テスト」を見れば、どのようなテストが指向されているのかがよくわかる。「筆記」は「筆記（リーディング）」となった。これは、「必要な情報を整理したりする力や談話構成を理解する力、要約する力等」を測るとしている。「筆記（リーディング）」からは、「発音・アクセント問題」や「文法・語法問題」が消えた。かねてより発音の間接的な測定である「発音・アクセント問題」は、その妥当性が疑問視されていたことを考えると、当然かもしれない。「発音・アクセント」は、聞き分けに関しては共通テストや認定試験の「リスニング」によって、発音に関しては認定試験の「話すこと」によって測るという立て付けに見える。「文法・語彙問題」が測定してきた文法・語彙知識は、4技能の活用を通して見ることになる。文法・語彙知識は、メッセージの発信や受容の中で問うということだ。

「思考力・判断力・表現力」を共通テストの「英語」でどう問うかも1つの注目点であろう。「高等学校学習指導要領案」では、「思考力・判断力・表現力」に関して、「具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを論理的に適

切な英語で表現する」としている。「筆記（リーディング）」においても「リスニング」においても、ほとんどの問題で「目的や場面、状況」が示されているのはこのためだ。

さらに、テスト・タスクは「具体的な課題（オーセンティックなタスク）」が設定されている。それらのタスクは、ただ単に「内容に合う選択肢を選びなさい」というような、単なるテスト・タスクではない。たとえば、「筆記（リーディング）」の第6問は物語文であるが、ストーリー・レビューを完成するタスクとなっている。ちなみに、「試行テスト」には、「センター試験」同様、日本語に訳すタスクは含まれていない。

リーディングのテキスト量は、現状より長くなっている。これまでのセンター試験の「英語」でも、あれだけのテキスト量を時間内に読んで解答するためには、ある程度のスピードで読む必要がある。共通テストでは、それ以上の情報処理能力が求められることになろう。

「リスニング」は、「複数の情報を聞いて判断したり、講義を聞いて内容を把握したりする力等」を評価することをねらい」とするとしている。今回の「リスニング」では、センター試験同様に音声が入り、2回流れるセットと音声が入り、1回流れる問題を含むセットが比較された。これは、試行であるから、最終的にどちらが採用されるかわからない。

ただ、今日の多くの外部試験では、音声は1回しか流れない。理由は、現実の生活では繰り返し聞けるものはそう多くないからだ。留守番電話などは聞き返しが可能であるが、それ以外の多くの場合は、繰り返し聞けるわけではない。現実のリスニングでは、重要な情報や1度聞いただけでは聞き取れないような情報は、繰り返し話されたり、理解の確認が行われたりすることになる。逆に、現状は、2回聞くことになっているから成立してしまう問題もある。音声が入り、1回しか流れないことで、より自然な英語の聞き取りとなることが期待できる。

今後どちらのセットがいいかの検討を進めることになるだろうが、単純に2回聞ける方が受験生にとって安心だということにはならない。それは、全て2回聞くというセットは問題数がかなり少ないために、テストの情報量も少なく、測定誤差も大きくなると考えられるからだ。したがって、この問題は総合的

に判断されなければならない。

「センター試験」の「英語」は「筆記」200点「リスニング」50点という配点であったが、共通テストにおける「筆記（リーディング）」と「リスニング」の配点は今のところ明らかになっていない。これがそれぞれ100点というような均等配点の可能性もあるし、ある種の傾斜配点の可能性もある。センター試験に「リスニング」が導入された当時は、技術的なトラブルの危惧もあり、配点比率が抑えられたと思われるが、この配点比率は今日まで変わっていない。これが、10数年の時を経て重み付けが変わるかもしれない。

3. 認定試験の利用

大学入試英語成績提供システムへの参加申込のあった資格・検定試験から、「日本国内において、…広く実施されている実績がある」「英語4技能の全てを極端な偏りなく評価する」「高等学校学習指導要領との整合性が図られている」「CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) (ヨーロッパ言語共通参照枠) との対応関係並びにその根拠となる検証方法及び研究成果等が公表」されている、などの基準を満たすと判断されたものが認定試験として認められる。認定されたテストは、IELTS, GTEC, TEAP, TEAP CBT, TOEFL iBT, TOEIC, ケンブリッジ英語検定、実用英語技能検定（公開会場実施の4技能同時受験型）である。

これらのテストのデザインや結果のフィードバックの方式は、みな異なるために、厳密な比較は困難だ。そのために、CEFRを利用して間接的にテスト同士を関連付けようとしている。それぞれの認定試験の開発機関は、自分たちのテストをCEFRの6つのレベル（下から、A1, A2, B1, B2, C1, C2）に関連付ける作業（これをスタンダード・セッティングと呼ぶ）を行って、この結果を公表しており、これに基づき文部科学省はCEFRと各認定試験との一覧表を公表している。これは、それぞれのテストとCEFRを関連付けた結果を横に並べただけのものであるのだが、一覧表になっているために、それぞれのテスト結果が置き換え可能なような印象を与えてしまっている。

高校3年生の4月から12月までの間にいずれかの試験を2回まで受験することができることになっているが、異なる試験のうちどれを受験させるかは、

悩ましい。また、合否型の試験では、不合格だった場合、認定試験の記録が残らないのではないかという可能性も危惧される。

共通テストと認定試験は、どちらかまたは両方を利用することができるとなっているが、国立大学協会は、共通テストと認定試験の両方を課すという方針を出している。現状では、国立大学協会の案は、①一定のCEFRレベル以上を出願に際し求める「出願基準方式」、②認定試験の結果に応じて共通テストの結果に加点するという「加点方式」、③「出願資格」「加点方式」の併用という3つの案が提案されている。

ただし、共通テストは、2023年度までは「英語」を出題することは決まっているが、加点方式の場合は、2024年度以降共通テストがなくなれば、加点しようもなくなってしまう。また、東京大学は3月10日の記者会見で2020年度からの認定試験の利用は現時点では拙速として、その結果を入試の合否判定には使わない考えを明らかにした。

4. 変わるか個別試験

これまでの話は、共通テストと認定試験の話であるが、実は、個別試験のあり方についても4技能化が推奨されている。ここで推奨されているのは、一般入試での個別試験をも含むものなので、これまでに行われてきたAOや推薦入試での「優遇措置」とは異なる点に注意が必要だ。

現時点では、共通テストと認定試験のあり方が固まっていないために、個別試験のあり方はまだ見えてこない。ただし、東京外国語大学の新学部である国際日本学部の2019年度入試では、新聞報道等にもあったように、従来の3技能入試に加えて、ブリッティッシュ・カウンシルとの共同開発のBritish Council-TUFS Speaking test for Japanese Universities (BCT-S) というスピーキング・テストが実施されることが決まっている。そして、こうした流れは他大学にも広がっていく可能性がある。仮に、個別大学が自前でスピーキング・テストを開発・実施という方向でなくとも、外部試験の受験が求められるというような流れは、国公立大学のみならず私立大学でも広がっていくかもしれない。

5. 高校英語教育はメッセージをどう受け止めるか

これまでの英語教師は、従来の入試制度での何ら



かの「成功体験」を持っていただろう。しかし、この新しい入試制度を経験した英語教師はまだいない。ということは、「成功モデル」はないということである。このため、しばらくの間は、この入試制度での「成功モデル」を求めて混乱が続くだろう。

気になるのは、認定試験を意識しての指導が、従来の「英検対策」のような捉えである点だ。「スピーキング・テスト」対策をALTに丸投げするという傾向も気になる。生徒の学びの中心となる授業そのものを変えようとするこれらのアプローチでは、期待する効果を生まない可能性がある。4技能入試に対応するには英語授業全体の改革が必要だ。

たとえば、従来通りの訳読を中心とした指導では、「リーディング」も十分な対応ができるとは思えない。それは、「認定試験」でも「共通テスト」でも同じであろう。まず、これらのいずれのテストにも「英文和訳問題」はない。そのみならず、リーディングのプロセスにおいて、日本語にいちいち訳しながら読む時間はない。

では、授業をどう改革すべきか。この答えを求めて、根岸他(2016, 2017)は学校英語教育の調査を行った。そもそもこれまでの学校英語教育で、英語力を(どれくらい)伸ばしてきたのか、意外とわかっていない。実際にはその伸びは学校によってかなり異なっている。2年間での伸びが全くない学校から、全国平均の倍近く伸ばしている学校までである。これらの調査では、GTEC受験の全国の高等学校からスコアの伸びの大きな学校を選んで、その要因を探っている。

結果的に、英語力を伸ばしていた学校は、基本的に英語で授業を行っていた。ただし、「基本的に英語で授業を行っている」ということは、象徴的な物言いであって、様々なことと連動している。

最も重要なのは、英語力を伸ばしている学校では、生徒自身が授業中英語を処理する時間をたくさん持っているということである。「生徒自身が英語を処理する」とは、生徒ひとりひとりが自分で英語を読んだり、聞いたりして、理解し、生徒ひとりひとりが英語を書いたり、話したりしていることを意味する。当たり前なことだが、話せるようになるためには、生徒自身が話さなければならないし、書けるようになるためには、生徒自身が書かななければならない。聞けるようになるためには、生徒自身が聞かなければ

ならないし、読めるようになるためには、生徒自身が読まなければならない。訳読を中心とした授業の問題は、教師の説明が授業の主となり、生徒が英語そのものを処理する時間はきわめて限られている。

また、英語で授業を行っている教師は、そうでない教師に較べて、授業の組み立てにおいて、より言語活動を指向する傾向がある。私が訪問した英語力を伸ばしている学校の生徒は、みな生き生きと言語活動に取り組んでいた。言語活動を指向するということは、言葉の形式についての説明や問題演習だけでなく、意味のやり取りを中心とする言語活動をどう行うかについて考えるということだ。ただし、その際、基礎・基本と活用のどちらに力点を置くかについては、生徒の実態をよく見て判断する必要がある。

実は、この大学入試改革の波及効果は、既に出始めている。ただし、明確な波及効果が出ているのは英語教育産業で、彼らはすでに(とりわけスピーキングに関して)様々なサービスを提供し始めている。それに対して、高校英語教育は、全体的に見れば、まだ目に見えるような変化が起こっているとは言えないだろう。

しかし、もし今回の英語教育改革で高校英語教育が変わらなければ、世の中は学校英語教育に多くを期待しなくなってしまいかもかもしれない。テストが導く英語教育改革の成否は、教室で生徒に向き合う教師にかかっている。

<参考文献>

- * 根岸雅史・加藤由美子・森下みゆき・岡部康子(2016).「英語コミュニケーション能力を伸ばしている学校はどんな学校か?」
(http://www.arcle.jp/report/2016/pdf/0118_02.pdf)
- * 根岸雅史・加藤由美子・森下みゆき・鹿島田優子・岡部康子(2017).「スピーキング力を伸ばしている学校はどんな学校か?」
(http://www.arcle.jp/report/2017/pdf/0115_01.pdf)
- * 楽天リサーチ株式会社(2012).「日本の英語教育に関する調査」
(<https://research.rakuten.co.jp/report/20121121/>)

新「大学入試」と Writing 指導

新潟医療福祉大学 今井 理恵

1. はじめに

目下進行中の高校教育改革は、大学教育改革と大学入学者選抜改革と一体を成す改革です。すなわち、高校英語教育における4技能(5領域)の学習指導強化と4技能を重視する入試改革は軌を一にしています。周知のとおり、2020年度から始まる(2021年1月実施)「大学入学共通テスト」(以下、「共通テスト」)では、「話す・書く」を加えた4技能テストを実施することが表明されています。そのような中、高校英語のライティングでは何をどのように指導したらよいかを検討します。

2. これまでの「大学入試」W 課題

従来の大学入試で「書くこと」は不問であったかということ、もちろんそのようなことはありません。国公立大学の二次試験や私立大学の個別試験では、ライティングの設問で自由英作文課題が出題されています。高校での学習指導に良くも悪くも大きな波及効果をもつ大学入試ですが、そのライティング設問ではどのような課題が出題されているのでしょうか。

大学入試問題で出題されたライティング設問(自由英作文)での課題(タスク)を分析したものに、Watanabe (2016) やその追試研究を行った塩川・金田 (2017) などがあります。これらはジャンルの観点から課題を分析しています。Watanabe (2016) は、大学入試のライティング課題を、順次的説明(sequential explanation)、意見(exposition)、考察(discussion)、個人的感想(personal reflection)のジャンルで分類し、分析しました。その結果、出題された課題のジャンルは、意見が42.8%、個人的感想が41.1%でした。このように大学入試で求められる課題のジャンルは非常に少なく、また分量については150 words前後で書くことを求める課題が多い

ことが分かりました。

以上から、従来の国公立大学の二次試験や私立大学の個別試験のライティング設問の課題(タスク)はジャンルによって分析できますから、これに応じる形で高校英語ライティングの指導が可能です。したがって、新「大学入試」として実施される「共通テスト」のライティング設問も課題を同様に分析し、指導することにします。

3. 「共通テスト」のW 課題

文科省は、「共通テスト」では民間の資格・検定試験(大学入試センターが認定した「認定試験」)を活用して、「書くこと」を含めた4技能を評価する方針を打ち出しています(文部科学省、2017)。今現在(2018年2月現在)、複数の民間事業者が名乗り出ていますが、その中でも、高校生にとって馴染みのある試験に英検があります。そのうち、CEFRのA2レベル、B1レベルにそれぞれ相当する英検準2級、2級のライティング出題例は次の①②(いずれも2017年第3回実施)、また別の認定試験候補として、GTECのライティング課題は③の通りです。

① **英検2級出題**：「以下のTOPICについてあなたの意見とその理由を2つ書きなさい。POINTSは理由を書く際の参考となる観点を示したものです。ただし、これら以外の観点から理由を書いてもかまいません。語数の目安は80語～100語です。

TOPIC : Some people say that the number of cars in cities should be limited. Do you agree with this idea? POINTS: Convenience, Publics safety, The environment」

② **英検準2級出題**：「あなたは外国人の知り合いから以下のQUESTIONをされました。QUESTIONについてあなたの意見とその理由を2つ書きなさい。語数の目安は50語～60語です。

Q. Do you think fast-food restaurants are a good thing for people?」

③ **Basicタイプ出題**：「あなたは授業中に下記のテーマで英語のエッセーを提出することになりました。



エッセーのテーマ：あなたが今、「やってみたいこと」や「やっておくべきと思うこと」について、自分の考えを書きなさい。

上記3題はいずれも意見 (exposition) のジャンルに分類され、これは先のWatanabe (2016) が明らかにした大学入試の出題傾向を踏襲しています。

したがって、「共通テスト」のライティング課題もジャンルの考え方で、テキストの「型」を捉えてライティング指導することができます。

4. ジャンル準拠ライティング指導

ジャンルの定義は様々ですが、次のように考えます。ジャンルとは「特定の文化で生じる、日常的・学問的・文学的テキストの、区別がつき頻発する型 (recognizable and recurring pattern)」(Hammond & Derewianka, 2001) であり、特定のテキストタイプに決まって表れる「型」です。

ジャンル準拠ライティング指導では、この「型」を教師が生徒に丸ごと与え (明示的に指導し)、生徒は特定の「型」を用いたモデル文 (文章例) を見習いつつ教師やクラスメートの助けを借りて学習します。やがて「型」を自分のものとした生徒が、自力でまとまりのあるテキストを書けるように指導します。従来の英作文指導のように、1文レベルの可・不可、正誤に留まっていたは、いつになっても「共通テスト」で求められるまとまりのあるテキストの全容を捉えることができません。そこで、自力で書けるようになるまでのプロセスでは、学習タスク、練習タスクを用意し、両タスクに取り組む時間を十分に確保して、「型」を繰り返し練習します。その後、慣れ親しんだ「型」を実際に使えるか (自力で書けるか)、生徒の力試しをするのが評価タスクです。

上記「英検2級」問題を評価タスクとした場合の課題 (タスク) 例と指導手順を示します。

* 【課題 (タスク) の例】

学習タスク : Some people say that the number of plastic bags given away at stores should be limited. Do you agree with this idea?

モデル文 : Yes, I agree. I have two reasons. First, if people have fewer free plastic bags, the amount of trash they produce will decrease because they will want to save the cost of garbage bags. Second, fewer plastic bags will be better for the environment. Making plastic requires a lot of oil and energy and pollutes the air during the process. Fewer plastic bags mean less pollution. Therefore, I think

that the number of free plastic bags given away at stores should be limited.

練習タスク : Some people say that the number of bicycles in cities should be limited. Do you agree with this idea?

評価タスク : (上記「英検2級」出題例に同じ)

* 【課題 (タスク) の指導手順】

学習タスク (learning task) : ①状況把握 (developing the context) : 教師はクラス全体で、ジャンルの知識 (テキストは、誰に向けられているか、目的は何か、どのような状況で用いられるか等) を確認する。生徒は扱うテキストが (テキスト内の言葉づかいやその意味が) ある文脈でどのような役割を果たすかを理解する。②共同解体 (modeling and deconstructing the text) : 教師と生徒、生徒と生徒で共同して、モデル文を分析する。生徒に「型」= 「構成」「内容」「言語表現」を捉えさせる。③共同組立 (joint construction) : 共同解体で分析した「型」を試す。教師と生徒、生徒と生徒が共に、モデル文と同様のまとまりのある文章を作成する (共同して組み立てる)。④自力組立 (independent construction) : 生徒が今度は自力で「型」を試す。モデル文と同様の文章を書く。

練習タスク (practice task) : 生徒は学んだ「型」を用いて、自力でまとまりのある文章を書く練習をする。評価タスクのリハーサルとなる練習タスクには評価タスクとパラレルの課題 (同様の「型」を用いて書く相似形の課題) を設定する。これを2題~3題こなすと生徒は「型」に習熟する。

評価タスク (assessment task) : 習得した「型」を用いて生徒が自力でまとまりのある文章を書けるか確かめる。評価タスクは実施まで生徒に伏せる。

課題 (タスク) は、教科書の単元ごとや題材内容が関連する複数単元ごとに設定し、単元の初回授業であらかじめ (単元学習後に取り組み課題を単元学習前に) 提示します。その目的は生徒に学習の見通しを持たせるためです。すると、生徒は単元学習中にも学習後の課題に使う語彙や表現を意識し、与えられた課題について時間をかけて思考を深めることになり、課題に取り組むまで学習意欲を持続させることができます。これもジャンル準拠指導の利点の1つです。

5. まとめ

書くことの活動において生徒が書くことに習熟するために、文章例 (モデル文) を十分に示し、多くの準備時間を確保することは、新高等学校学習指導要領案 (2018年2月14日公表) でも明記されました。この方針に、ジャンル準拠ライティング指導は適っています。教師が指導するテキストについてジャンルの意識を持ち、生徒にジャンルの知識を明示的に指導することは、生徒を自律した書き手に育てることになり同時に「共通テスト」対策となります。

新「大学入試」とSpeaking指導

松本大学 和田 順一

1. 高等学校卒業時に身に付ける能力

英語の五つの領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」）において、高等学校卒業時にどの程度の能力を身に付けるかを設定する必要がある。これは五つの領域全てに言え、各高等学校でCAN-DOリストの形で既に設定されているものである。

次期学習指導要領の方向性として、「これまでの課題や高校生の多様化に対応するため、高等学校卒業段階で求められる「外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる力」（必修教科目でCEFRのA2レベル相当、選択科目で同B1レベル相当を想定）を育成するため五つの領域を総合的に扱う科目として「英語コミュニケーション」を設定する」（文部科学省、2016、下線は執筆者による）とある。つまり下線部で示した程度のSpeakingによる言語活動ができる能力を目標とし、様々な方法を用い、日々言語活動を実施していく必要がある。

その際、次期高等学校学習指導要領（案）（文部科学省、2018）*と次期中学校学習指導要領（文部科学省、2017a）の「言語の働きに関する事項」にある、中学校で学ぶ言語の働きを習得し、そして高等学校で新たに示されている、「言い変える」「話題を発展させる」「共感する」「望む」「理由を述べる」「要約する」「提案する」「主張する」「許可する」「説得する」等（紙面の都合上、一部のみ掲載）の言語の働きを含めることが必要である。同時に、「言語の使用場面の例」にある高等学校での情報を得る場面を組み込み、Speakingの言語活動を実施し、目的、場面、状況に応じた活動を多く経験し、その経験を蓄積し、振り返り、次の活動に活かす必要がある。これらの繰り返しの経験や振り返りにより、次期高等学校学習指

導要領（案）の英語コミュニケーションⅠの「話すこと[やり取り]、[発表]」にある「（前略）、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して伝え合うことができるようにする」（文部科学省、2018）ことができるであろう。

2. 五つの領域の関係

英語の五つの領域は、相互に関連し合い成り立っている。高等学校では、それらの領域の有機的関連は不可欠である。ここでは関連について「話すこと[やり取り]、[発表]」の視点から述べたい。

Speaking能力を伸ばす観点からは、「聞くこと」の言語活動は、他の人はある目的で、ある題材に関し、ある場面・状況で、ある相手に話をする時には、このような話し方をするという重要なモデルとなる。これらの観点を生徒に意識させるには、最初の段階としてワークシート等で気付かせるのも良い。

また「読むこと」の言語活動では、知った表現や言い回し等が、目的、場面、状況、相手意識を想定することにより、実際のSpeakingに活用できる。また文章のジャンルによって、多様な文章構成も使用されており、これもSpeakingで参考になる。特に「読むこと」に関しては、現行高等学校学習指導要領解説（文部科学省、2010）に、実生活では体験できない経験を与えてくれる要素もあるとあり、生徒の学校生活や教室環境の制限も越えられるので、Speaking能力の育成に有効に活用できる。このためには、前述のようにそれらの観点を意識させて文章を見ていく必要もある。

「書くこと」に関して一例を上げれば、B1レベルの記述に、「関心のある分野のテーマについて、まとまりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見やその理由を加えて書くことができるようにする」（文部科学省、2016）とある。これは内容をま



とまりをもって構成し、説明したり、「意見」を加えて表現したりする複合的なSpeaking活動を考えたり、実施したりするのに役立つ。

また実際のコミュニケーション実施の観点からは、五つの領域は複合的に使用されている（授業で先生の話聞いてノートをとる。そのノートを見ながら、休んでいた友人に授業の内容を伝える等）。そのような有機的関連を考え、言語活動を実施したい。

3. 言語活動の実施方法

実際にSpeakingの言語活動を行う場合に、生徒が様々なことを学び、それらの表現等に慣れ、その後、言語活動を実施することが考えられる。

しかし、次期中学校学習指導要領解説（文部科学省、2017b）の（3）言語活動及び言語の働きに関する事オ「話すこと〔発表〕」の「（ア）関心のある事柄について、その場で考えを整理して口頭で説明する活動」に「その際、「その場で考えを整理して口頭で説明する」という言語活動の特徴から、初めから正確さを求めたり、必要な表現を練習したりしてから行うのではなく、伝える内容に重点を置きながら、教師は生徒の多様な発話を促し、その様子を見て必要に応じて適切な語彙や表現などを助言するという視点が大切である」（下線は執筆者による）とある。これは中学校の段階のことではあるが、指導方法としては高等学校に通ずるものである。先に、ある目的で言語活動を実施し、その後、生徒が自分自身の言語使用を振り返るとい指導方法も考えられる。これは、生徒自身のこれまでの知識から使用可能な英語を駆使し伝えるストラテジーの運用でもあり、また内容を効果的に伝えるための工夫に気付くという側面もある。生涯学習を続ける一人として大切な要素であり、高等学校でその能力をさらに鍛えたい。

4. 実際の言語活動

B1レベルの記述の一つ「知識のある時事問題や社会問題について、内容を具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする」（文部科学省、2016）を基に考えてみたい。

「内容を具体的に説明する」に関しては、高等学校一年生の段階から、英文を読んだ際、また生徒が発表した際、教師がinteractiveに“Could you give me

some examples?”等と問いかけをし、「先生はいつも例を求めてくるなあ」と思うようになることが大切である。次第に生徒はそのことを意識し、先に例を用意し、例を付け加えて話すようになるであろう。そのようになった際には、3.で述べたように、より効果的な表現方法に言い直し、生徒に工夫について気付かせていくことが可能である。

また「自分の意見を加えて話すこと」についても同様に、生徒が発言したり、読んだりした際にInteractiveに、“Why do you think so?”, “What do you think about that?” や “If you were in his/her position, what would you do?” 等と尋ねることにより、自分自身の意見を考えて言うことが当然となるであろう。生徒は主体的に読む力を身に付けることもでき、また読んだもの等に対し積極的に発言をすることもできる。

上記のような活動により、次期高等学校学習指導要領（案）（文部科学省、2018）の言語に関する事項の「話すこと〔やり取り〕、〔発表〕」にある「（前略）、情報や考え、気持ちなどを理由や根拠とともに伝え合う活動」を実施する力の基礎となっていくであろう。その後、さらに次の目標に向け、別の活動やタスクを実施していく。

5. 繰り返すことの大切さ

押さえない重要な点を、活動の中に含み、それら重要な点が生徒にとって当たり前にすることが大切である。また同様な活動の繰り返しにより、以前の学習の振り返りが、次の活動に大きく影響する。前回よりも効果的に伝えるために伝え方を変える等の工夫が可能になる。さらに同じ活動を行うことで、他の人が使用した良い部分、またその気付きの大切さを知り、それらを活用していくことができる。

実際の言語活動では様々な制約があるが、それらも繰り返し活動を経験することで、生徒はそれらに対する対処方法を理解し、実践していくであろう。

<引用文献>

- 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（案）』。※2月執筆時
- 文部科学省（2017a）『中学校学習指導要領』。
- 文部科学省（2017b）『中学校学習指導要領解説 外国語編』。
- 文部科学省（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）』。
- 文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』東京：開隆堂。

新「大学入試」と語彙指導

神戸大学 横川 博一

新学習指導要領は、高等学校では2022年度から全面実施となるが、2020年度からは大学入試センター試験の後継となる「大学入試共通テスト(新テスト)」と民間の資格・検定試験の二本立て、2024年度からは民間の資格・検定試験に一本化されることになっている。したがって、2018年度に高等学校に入学した生徒から新しい入試制度に移行する。

本稿では、英語運用力を支えるもっとも重要な要素である「語彙」に注目して、新しく始まる大学入試への対応を考えながら、日頃の語彙指導のあり方について考えてみたい。

正解を選びとる力を超えて

次の短文の語句補充問題を例に、あらためて語彙力とはどういった性質のものか、考えてみよう。

The newspaper reporter asked the people at the town meeting what they thought about the plan to build a new factory. Their answers () that most people did not like the idea.

- 1 showed 2 allowed 3 believed
4 concerned

(英検準2級2016年一次試験)

選択肢の動詞が日本語ではどういった意味を表すかを手がかりに、もっとも「うまくいきそうない」ものを選ぶことで、正解にたどりつけるかもしれない。しかし、この方法は、大変不確実で正解を選ぶまでに時間もかかってしまう。問題文を日本語に訳し、選択肢の動詞の意味を解説するだけでは、きちんとした英語運用力はおろか、試験対策としても有効ではないだろう。

1文目の内容から、「新聞社が新しい工場建設に関する調査をした」ということを即座に読み取り、その後続くTheir answersが「タウンミーティング

に出席した人たちの回答」だと理解し、空所には名詞節を導くthatが続いていることが目に入った時点で、「～という回答を示した/～という回答が得られた」という意味の動詞が入ることが予想されるはずである。their answersという句が無生物名詞句であることに気づくことも重要である。The data/statistics showed that ... などという言い回しに慣れていれば容易に正解を導くことができる。Their answers allowed/ believed/concernedという組み合わせは、後に続く要素によってはありえないコロケーションではないが、少なくともthat節が続く環境では、まずありえない。

英語に触れる機会と自分でも言ってみる機会をできるだけ多くすることで、〈意味〉と〈形式〉と〈動き〉の理解を伴った、「英語の勘」が働くようになる。こうした語彙力が身につくよう日ごろの授業実践を工夫したい。

「言いたいこと」から「語彙選択」へ

新しい大学入試では、民間の検定試験の導入によって、スピーキングやライティングの技能も本格的に試されることになる。

たとえば、TOEIC® Listeningテストには、次のような応答問題が出題される。

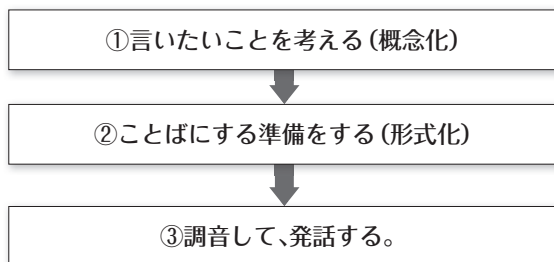
Imagine that a Canadian marketing firm is doing research in your country. You have agreed to participate in a telephone interview about television viewing.

1. How often do you watch television?
2. What kinds of program do you usually watch?
3. Describe your favorite television program.

[TOEICスピーキングテスト・応答問題サンプル]



こうした模擬問題を使って演習したり、さらに応答サンプルを提示したり、解説することも無駄ではないが、こうした問題に対応できる力は一朝一夕に身につくものではない。日ごろの授業実践でどんなことができるか、ことばを産出するプロセスを参考に、語彙に焦点をあてて考えてみよう。



①「言いたいこと」を考える習慣をつける

わたしたちはよく「自分の思っていることや考えていることをことばにするのはむずかしい」と言うことがあるが、ことばにする前に、発話のための準備段階がある。アイデアを生み出すというプロセスは、一見簡単な作業のように見えるが、何が求められているのか、それは誰に向けられるものか、発話する目的は何か、など多くのことが含まれる。「言いたいことを考える」というだけでも、その様相はかなり複雑であることがわかる。自分は何を言いたいのか、を考えることを習慣にすることが、語彙力を身につけるには、何よりも大切なことである。

②必要な語彙を検索する習慣をつける

①で行った発話計画は、まだ言語になっていない概念のレベルであるが、それが整ったら、次はいよいよことばにする準備をする。言語化していく作業は「形式化」と呼ばれているが、自分の考えを述べるために必要な語彙を「頭の中の辞書」にアクセスして、適切な語彙を選び出し、取り出すということを行わなければならない(この後、文法規則に照らして語を配列するという文法符号化の作業があるが、ここでは立ち入らない)。この作業をいかにスムーズに行うことができるかが、流暢な発話のカギとなる。言おうとする内容を伝えるための語彙、しかも的確な語彙を取り出してくることを習慣にすることもまた、語彙力を身につける有効かつ効率的な方法なのである。単語は単語帳で暗記し、英語の文章を日本語に置き換えていくという作業だけでは、十分な英語運用力を身につけることがむずかしい理由はこちらのところにある。

授業のプロセスとしては、(1)与えられたテーマやトピックについて、自分なりの考えをめぐらせてみる、(2)セマンティック・マッピングの手法などを使って、自分の考えをできるだけ明確にしてみる、(3)ペアやグループで実際にしゃべってみて、自分に足りないところが何かを考えてみる、(4)参考になりそうな発話サンプルを読んだり聞いたりして、自分の考えを練り直したり、それを効果的に伝える工夫をしてみる、といったことが考えられる。こういったことを普通の教科書を使った授業の中でやっておけば、新「大学入試」には十分対応できる。

大幅に増える教科書で扱われる語数

下表に示すように、新しい学習指導要領の施行に伴って、もっとも大きく変わるの、教科書で扱われる語数の大幅な増加である。

	現行版	新学習指導要領 (CEFRの目安)
小学校	—	600～700語 (Pre-A1～A1前半)
中学校	1,200語程度	1,600～1,800語 (A1～A2前半)
高等学校	1,800語程度	1,800～2,500語 (A2～B1)
計	3,000語程度	4,000～5,000語

基本的なコミュニケーションができるようになるためには、まず、およそ2,500～3,000語の語彙に習熟することが重要と言われており、知っている語彙は多いほど、文化常識 (cultural literacy) もそれだけ増えることになり、理解したり産出できる内容も豊かになるはずであるから、語彙数の増加は歓迎されるべきことである。

しかし、現場からは、今でも大変なのに、これ以上語彙が増えたらどうしようと、悲鳴が聞こえてきそうである。教科書に登場する新出単語は、音声、意味、つづり、用法について丁寧に扱うのがよいと思われるが、そのときに何もかも定着させようとせず、少し時間を置いてリテリングする機会を設けるなど、何度も繰り返し使う場面を授業の中に設定するのが有効でしょう。また、上で触れたように、スピーキングやライティングといったプロダクションの機会を活かして、語彙を繰り返し使用することによって、ことばのいろいろな側面が、少しずつ学ばれていって、新しい入試にも対応できる、確かな英語運用力の育成につながるのである。

『CROWN English Communication I・II・III New Edition』 —「思考力・判断力・表現力」養成のための提案—

『CROWN』シリーズ代表著者

慶應大学名誉教授 霜崎 實



1. はじめに

改訂版『CROWN English Communication III』(以下、『CROWN III』)の編集作業を終え、内容・形式共に一新した教科書を刊行する運びとなった。改訂にあたり、現行版(2015年初版)の優れた点を継承しつつも、改善すべきところについては躊躇なく修正を加えることで、さらに充実した教科書に進化したものと確信している。

本稿では、改訂のポイントを紹介すると同時に、2020年度から始まる「大学入学共通テスト」や「民間の試験」の導入を踏まえて、「思考力・判断力・表現力」養成のための提案を行ってみたい。

2. 編集の基本方針

クラウン・シリーズの基本的な編集方針は、(1) 題材の多様性、(2) 生徒の思考力や知的好奇心に訴える力、(3) 現代社会の包含する諸問題への視点、(4) 質両面での格段の充実、(5) 4技能の有機的な関連の強化、などの柱によって貫かれている。今回の改訂にあたって、これらの基本方針のもとに、できるだけup-to-dateな内容を盛り込むことに留意しつつ編集作業を進めた。

3. 改訂のポイント

まず第1に、本文の提示方法に修正を加えた。『CROWN III』は合計10レッスンからなり、それらが3部構成となっている点は現行版と同じだが、一部、レッスンの内部構成を変更した。Part 1とPart 2では、各セクションが見開き構成となっているが、Part 3では、セクションの区切りは明示しつつも、テキスト全体を一続きの英文として読めるように、切れ目なく提示する形をとった。より一般的なテキストに近づけるための配慮である。それに伴い、聞

き取り問題(True or False)と内容把握問題(Quick Check)は本文の直後にまとめて配置した。

第2に、Post-reading活動の改訂を行った。まず、Summaryの扱いについて、Part 1では()内に適語を挿入する形式、Part 2では下線部に適当な語句を挿入する形式、そしてPart 3ではkey wordsを参考にして、生徒自らが自分の力で英文要旨を書く練習をする形式とした。つまり、後半に行くにしたがって、よりチャレンジングな活動を要求する形とすることで、生徒の側の活動の比重に変化を持たせた。

第3に、現行版のActivitiesをYour Reactionとして、新たな提示方法を採用した。詳しくは第5節で述べるが、要は4技能を駆使してコミュニケーション活動を行うための「道場」のような場を提供しているのがこのセクションである。生徒が自らの経験や知識や感性をもとに、自分の意見をまとめ、相互に発表し合うことで、「思考力・判断力・表現力」養成のために活用していただきたい。

4. 題材とレッスン構成

題材の良し悪しは、英語教科書の生命線である。クラウン・シリーズでは、質の高い題材を精選し、その配列について十分な検討を重ね、さらに時代のニーズを対応すべく、今回も大胆な差し替えと修正を行った。以下、ラインアップのテーマと概要を示す。

本課10レッスンのうち、★印を付した4レッスンが今回の改訂で新たに導入したものである。☆印付の2レッスンについては、かなりの修正を行っているので、都合6レッスンが差し替え、または大幅な修正を伴うものとなっている。さらに、その他のレッスンについても、必要に応じてマイナーな修正を施した。なお、Storyについては、現行版の3編から2編へと減らし、巻末にまとめて提示した。

レッスン末尾のOptional Readingについても差し



『CROWN English Communication III』の題材：テーマと概要

★新題材
☆部分改訂

レッスン・タイトル	テーマと概要
★[L. 1] Life as a Journey	[生き方・日本文化] 人生は旅に喩えられることがあるが、まさに人生を旅に暮らした俳人松尾芭蕉の人生観について考える。
[L. 2] God's Hands	[生き方・医療] 心臓外科医天野篤氏へのインタビューから、医師を志した動機、医師として心構えなどについて学ぶ。
☆[L. 3] Captured by Art	[芸術] 日常生活の中に持ち込まれた芸術、インスタレーションを取り上げ、具体的な作品と背後にある思想について学ぶ。
★[L. 4] Does Money Make You Mean?	[社会・経済] 格差社会の中であって、お金は人々から優しさを奪ってしまふのか。アメリカでの心理学の研究を紹介する。
★[L. 5] The Biggest Event in Human History...Or the Last?	[科学] 人工知能(AI)は人類に幸福をもたらすのか、あるいは不幸や破滅をもたらすのか。AIと人間の将来について考える。
[L. 6] Only a Camera Lens between Us	[生き方・平和] 戦争や紛争の絶えない世界であって、武装解除や兵士の社会復帰活動に携わる瀬谷ルミ子氏の活動を紹介する。
[L. 7] Being Bilingual	[言語・比較文化] 一つの国や地域での二言語併用・多言語使用が当たり前になっている中で、改めて母語の価値を問う。
[L. 8] The Magic of Reality	[科学] 科学的な思考とは何か。イギリスの著名な科学者・作家であるドーキンス氏の考え方を紹介する。
☆[L. 9] Green Revolution, Blue Revolution	[環境] 人間は水なしで生きることができない。現在、世界各地で起きている水問題への取り組みについて紹介する。
★[L. 10] Looking into the Eye of History	[平和] 2016年に広島を訪れたオバマ大統領のスピーチを精読し、核のない平和な社会の実現について考えを深める。
[Story 1] The Silent Miaow	[ユーモア] 飼い主のいない子猫が人の家族に受け入れられるまでの過程を、猫の視点から描いたユーモア小説。
[Story 2] The Storyteller	[ユーモア] 列車で偶然同席したやかましい子供たち。彼らを静かにさせるために主人公が語った物語とは？

替えを行った。“Ise Pilgrimage” (L.1)、“Can Money Buy Happiness?” (L.4)、“AI vs. AS” (L.5)、“Is It Magic or Reality?” (L.8)、“Fresh Water? No Way!” (L.9)の5編は、新しい題材として今回導入したものである。

5. 「思考力・判断力・表現力」養成を踏まえた教科書の活用

新学習指導要領では、個別の知識・技能を獲得するだけでなく、アクティブ・ラーニングを通じて問題発見・問題解決を行う主体的な学習が重視される。生徒は必要な情報を収集したり、相手に自分の考えを伝えたりすることで問題解決を試みるが、その際に必要とされるのが「思考力・判断力・表現力」である。文科省の見解によれば、これらの能力は国語や外国語のみならず、あらゆる教科のすべての分野における必須の能力として位置づけられていることから、この理念の重要性が窺われる。

これを受けて、2020年度からは「大学入学共通テスト」および「民間試験(英検、GTEC他)」が導入され、さらに2024年度からは全面的に民間試験に移行することが決定されている。2018年度の4月に入学する高校1年生から、この新たな試験形態に移行することになるが、その際、「思考力・判断力・表現力」が問われることが予想される。そこで本節ではこうした能力の養成を視野に入れ、以下、『CROWN

III』の活用について具体的な提案をしてみたい。

Pre-reading活動の一つとして、Take a Moment to Thinkを設けた。本課に入る前に、本文の内容に関連した英問に対して、自分の意見や感想を述べるのが活動の主眼である。各レッスンで3問あるが、いずれも自らの経験や知識で容易に応答できるような質問に限定した。いわば「呼び水」として、生徒の「背景知識」を活性化すると同時に、本課への取り組み姿勢を強化する働きを担っている。授業では、ペアまたは小グループを単位として、英語での応答練習に取り組みたい。その上で、何人かの生徒を指名して、答えさせるのもよい。

同じくPre-reading活動の一つとして、Before You Readがある。これは比較的平易な英文で書かれた本文へのイントロダクションである。また、本文のテーマに関連した重要語句が太字で印刷されており、末尾の英文の定義とマッチングする問題ともなっている。文脈から意味を推測する活動を通じて、「思考力」と「判断力」が問われることになる。

While-reading活動としては、各セクションの末尾に平易な内容把握問題を3問ずつ提示した。この問題の多くは、テキストを確認すれば容易に答えが得られるようなものであるが、生徒のテキスト理解を側面から援助し、確認する役割も担っている。活動としては、あらかじめ生徒に答えを書かせた上で、口頭練習で正解を確かめるようにすることもできる。

Post-reading 活動は2部構成となっている。第1部 Comprehensionは、(1) What Are the Key Points? (内容把握問題)、(2) Summary (英文要旨作成問題)、および(3) Food for Thought (本文ついて内省的な思考を要求する問題) から成る。(2)についてはすでに第3節で触れたので、ここでは(1)と(3)について簡単に説明するに留める。内容把握問題は、本文を読んだ後で理解を確認するために使うのが一般的だが、本文を読む前にざっと目を通すことで、本文の主題を予想させるような形で活用することもできる。Food for Thoughtは、日本語での設問形式を採っているが、本文の主張に対して、自らの思考力を試すような問を設定している。内容理解をさらに一步深めるための設問である。

第2部 Your Reactionは、生徒の「思考力・判断力・表現力」の養成に特化されたセクションである。まず、本文の内容・主張について二人の対立する意見を参考にしながら、自分の意見をまとめる活動を行う。授業では、それぞれが自分の意見を英文でまとめた後に、小グループでの意見交換に移るとよいだろう。自分の意見とは異なる意見に接することで、生徒は新たな気づきを得ることができるともかもしれない。これに続く自由課題では、考えさせるような問題を提示してあるので、ディスカッションやライティングに活用することができる。さらに、Your Reactionの後半では、Optional Taskが設けられている。ここでは写真などの視覚的情報を参考にしながら、想像力と創造力が要求されるような活動を行う。例えば、L.1では英語で俳句を作る課題が出されているが、生徒一人ひとりの感性と表現力が問われる。この活動を進める際には、グループ活動やクラスでの発表会などを企画することで、学習意欲を高めることができるだろう。

各レッスンにOptional Readingを設けたことも、『CROWN Ⅲ』に特徴的な構成の一つである。ここでは350語程度の短い英文と内容把握問題が用意されているが、目的は二つある。一つは、本課本文の理解をさらに深めるような、興味深い関連情報を扱った英文を読むことで、同じテーマについて様々な観点から考えるきっかけを提供することである。例えば、L.6の“Design Your Own Life”は、本文で取りあげた瀬谷ルミ子さんから高校生へのメッセージとして、この教科書のために特別にご寄稿いただいた

ものである。瀬谷さん自らの言葉に共感することができれば、本文への理解や共感もいっそう深まるだろう。いま一つの目的は、生徒の英文読解力を試験形式で試すことである。内容把握問題は、入試形式に頻繁に見られる多肢選択式を採用したので、一定時間内に重要なポイントを的確に把握できたのかどうかを確認することができる。制限時間を設けて、速読の訓練に利用することもできる。

以上をまとめると、生徒は本課本文を精読し、内容を把握し、さらにそれをもとに、自分の知識や経験に照らし合わせながら、本文での主張に対して自分の考えをまとめる活動を行う。さらにクラス内でのコミュニケーション活動を通じて表現技術を高めるのと同時に、最終的には自分の知識を内在化・活性化していくことになるのである。巻末にはFunctional Expressionsを掲載しておいたので、これらの活動を行う際の参考にさせていただきたい。

6. おわりに

本稿では、『CROWN Ⅲ』の基本編集方針ならびに今回の改訂のポイントを解説した上で、「思考力・判断力・表現力」を高める観点から、教科書の活用方法についていくつかの提案を行った。

これらの能力を高めるための構成上の仕掛けを積極的に活用していただくことで、「思考力・判断力・表現力」を問う入試問題にも対応できる能力を体得させるようにしたい。

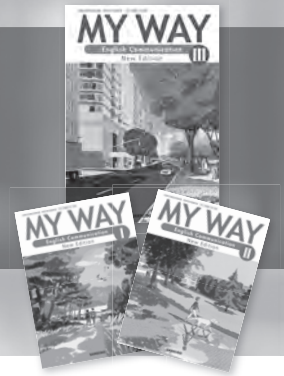
もちろん入試改革の観点からは、より実践に即した対応も必要となる。2017年11月には、大学入試センターから「共通テスト」の試行調査の問題が公表されているが、英語に関しては、2018年の2月～3月に試行調査が行われるということなので、現時点(2018年1月現在)では、どのような問題形式が採用されるのかを予想することは難しい。国語問題の形式から推定すると、複数の資料を読み込んだうえで、推論をしたり結論を下したりする問題が出される可能性はあるだろう。いずれにしても、どのような形式が採用されるにしても、教科書等で基礎力をしっかりと身に付けておけば、臨機応変に対応することが可能だろう。その意味においても、改訂版『CROWN Ⅲ』が多く現場の諸先生からのご支持を受け、生徒にとっての力強い味方となることを切に願ってやまない。

『MY WAY English Communication I・II・III New Edition』の編集方針

最近の潮流にも合致している編集—『III』の応用・発展と題材内容を中心に—

『MY WAY』シリーズ代表著者

大阪大学・桜美林大学名誉教授 森住 衛



1. はじめに

本稿は、『MY WAY English Communication I・II・III』(以下、I・II・III)のうち『III』の改訂の報告です。ただし、『III』は『I・II』の上に積み重ねていきますので、『I・II』も併せた改訂を総括的にみて、その上で『III』の特長に触れることにします。

周知のように、現在、学習指導要領の改訂と大学入試改革の真っ直中にあります。学習指導要領のうち教育課程関係(科目の種類など)では、2022年度から「英語コミュニケーションI・II・III」と「論理・表現I・II・III」の6種類になります。大学入試は2020-2023年度の間は、今までのセンター試験の流れを引き継いだ「大学入学共通テスト」と「民間の試験(英検、G TEC 他)」の2種類が行われ、2024年度からは全面的に民間に移行されます。

『MY WAY I・II・III』はこの最近の潮流に基本的には合致しています。というより、『MY WAY』が元々志向してきた方向性に学習指導要領や入試改革が近づいてきたと言えます。たとえば、新学習指導要領で言われているアクティブラーニングや入試改革の両方に共通する目玉の1つの「思考力」がありますが、『MY WAY』は題材に関する活動に常に思考を入れてきました。文法の理解も「なぜ」という思考の出発点を大切にしています。

以下に、このことを多少とも詳しく取り上げますが、全体として以下の3つに触れることにします。

- 『I・II』を中心とした基礎・基本
- 『III』を中心とした応用・発展
- 『I・II・III』の題材内容

2. 『I・II』を中心とした基礎・基本

まず、思考力の元になるのは基礎的な能力です。英語能力の基礎・基本はいろいろな諸相で考えられ

ますが、本稿では、『I・II』を中心としたものを、言語材料と言語活動の面から取り上げます。

1. 言語材料: 語彙と文法

古今東西言われてきていますように、「語学はやはり語彙と文法」です。この2つがしっかりと身につけていれば、コミュニケーションにも大学受験にも役立ちます。『I・II』ではこの2つの取り扱いを以下のように質量ともに強化しました。

(1) 語彙: 語彙力増進のための工夫

①<Exercises>(各課末)

語彙・表現のための問題を、『I・II』の各課のExercises 1にそれぞれ配しました。

②<Vocabulary Building>①-④

『I』は、品詞の区別、基本動詞の意味、接頭辞、接尾辞の4項目を取り上げ、『II』は、日英語の対応、関連語、語のプロトタイプ、米語と英語の4項目を取り上げています。この種の扱いは主に学習参考書が担っていましたが、現行の学習指導要領で「自学自習的な要素を取り込む」という方針になりました。『MY WAY』ではすでに前版からこのようにしています。

(2) 文法: 丁寧な説明と必要な繰り返し

①<Starter>(『I』の冒頭)

文法の扱いでの『MY WAY』の特長は、『I』の本課に入る前に設定した最も基本的な事項の確認です。品詞の名称の説明、自動詞・他動詞の違い、名詞句・形容詞句などの説明など、これまで看過されてきた基本事項を理解できるような認知的な指導を試みています。このような扱いは教科書では本邦初ではないかと自負しています。

②<Grammar>(各セクション)

丁寧なワンポイントの説明。キャラクターのシロクマの吹き出しで語らせている「一言説明」にご注目ください。平易な日本語で「簡にして要を得た」説明にしたつもりです。

2. 言語活動：最重要な「読む」「考える」

(1) Reading & Thinking

『MY WAY』は、4技能のいずれも大切に扱っていますが、とりわけReadingに重点を置いています。Readingは4技能の根幹に位置し、Thinkingを促進させるからです。なお、Thinkingについては、PISA型読解力を問う問題を取り入れて、強化しました。

(2) リーディングスキル

リーディングスキルの扱いで、『MY WAY』の長は、その丁寧さです。たとえば、『I』の第1課と第3課では以下のようなスキルを取り上げました。

● Reading Skill 1 [動詞と名詞]

第2段落を読みながら、動詞を□で囲み、名詞に下線をつけましょう。

● Reading Skill 3 [主語と(述語)動詞]

第2段落を読みながら、各文の主語を□で囲み、(述語)動詞に下線をつけましょう。

特に、Slower Learnerへの指導には、このような網羅的および段階的な丁寧さが必要なのです。

3. 『Ⅲ』を中心とした応用・発展

『Ⅲ』では『I・II』を発展させた方式で、以下の3つを取り上げています。

1. リーディングスキルの応用・発展

『I・II』で極めて基本的な活動を取り上げている一方で、『Ⅲ』で、パラグラフリーディング、スキミング、スキミングなどのリーディングスキルの練習に、ある程度の長さの文章を使って、実践的な応用・発展の活動を取り入れています。

2. センター入試方式の設問

『Ⅲ』では、Readingの活動の一環として、センター入試で使われている英文の4肢選択問題を、3つの段階に分けて、取り入れています。Unitの1では平均130語、2では330語、3では600語の英文を読んで、3択ないし4択の選択肢形式にしています。

3. Thinking と自己表現

『Ⅲ』のUnit 2および3では、『I・II』の〈Comprehension〉〈考えてみよう〉〈Self Expression〉を受けて、さらに応用・発展させた活動である〈Summary〉〈Think〉〈Your Opinion〉を設けて、基礎→応用、基本→発展の移行を図っています。特に〈Think〉と〈Your Opinion〉にはこれからの入試改革の方針を先取りするような内容を試んでいます。

4. 『I・II・III』に通底する豊富な題材内容

教科書の核になるのは本文の題材内容です。題材内容に高校生に訴えるメッセージ性がない教科書は、「魂」がないのも当然です。この理念のもとに、『MY WAY』では本課本文の題材に力を注ぎました。『I・II』は、紙幅の都合で、本課の題材の概要のみの紹介になりますが、『Ⅲ』は、多少とも詳しく紹介します。

1. 『I』の題材内容

- L1. 人の姓名のいろいろ：共通点と類似点
- L2. やなせたかしの『アンパンマン』の思想
- L3. オリンピックの歴史とその目的
- L4. ホスピタルアート：病院の癒やしの芸術
- L5. 世界のさまざまな文字のでき方・由来
- L6. 日本の伝統的な食文化：和食
- L7. 地雷原をハーブ畑に：篠田ちひろさんの挑戦
- L8. 古代ギリシャの船から見つかった謎の物体
- L9. 世界中で見られているセサミストリート
- L10. ピアトリクス・ポターが残した風景

2. 『II』の題材内容

- L1. 世界のピクトグラム(絵文字)のいろいろ
- L2. 海のゴミの回収方法：ある若者の試み
- L3. キューバ：平等と助け合いを目指して
- L4. 世界で最も貧しい大統領
- L5. 目で伝えるコミュニケーション：スポーツ編
- L6. エレベーターで宇宙まで行ける可能性
- L7. ZARD：歌がくれた勇気と希望そして絆
- L8. 言語接触：ことばの出合いは文化の出合い
- L9. チャップリン：喜劇の裏に青春時代の苦悩
- L10. 日本建築の不思議：台風でも倒れない五重塔

3. 『III』の題材内容

『Ⅲ』は大別して3つのUnitごとになります。Unit 1では、リーディングスキル(以下、RS1, RS2, RS3, …)の区分けで題材を取り上げています。RS5以降は、



[Get]で確認、[Try]で応用という二段方式をとっているため、11領域18種類の題材となります。

(1) Unit 1

- RS1. いろいろな言語の挨拶の意味と由来
- RS2. 地球上で最強の生物：クマムシの生態
- RS3. デジタルデトックス：PC機器症候を止める試み
- RS4. 紙の建築家：坂茂さんが望んでいること
- RS5. 葉をあてにしない「笑い治療師」のモットー
ジャンケンに勝つ方法は — 人間の心理の研究
- RS6. 東京のど真ん中にタヌキが住んでいる！
スウェーデンの Language Café の日替わり言語
- RS7. 高架鉄道跡に造られた長〜い「ハイライン公園」
次々と破られる 100メートル徒競走の記録
- RS8. 若者達が使っている「メール言語」の英語版
果物や野菜を生産する植物工場の長短
- RS9. 「隣人の日」が広まれば世界は平和になる
借り自転車を利用すれば一挙両得
- RS10. 葛飾北斎に倣った「エッフェル塔三十六景」
栽培不可能な「青いバラ」の実現の喜びと不安
- RS11. <広告>の英語 — 市のテニスクラブ入会の情報
<広告>の英語 — 「京都一日観光」の料金と見所

(2) Unit 2, Unit 3

Unit 2 と 3 は通しの Lesson 番号を使っています。

[Unit 2]

- L1. 英国でみかける「細長いボート」の役割
- L2. マチュピチュ村の村長だった日本人
- L3. 山中教授のiPS(人工多能性幹)細胞のしくみ
- L4. 日本人のように風呂好きだった古代ローマ人
- L5. どうなるか、人工知能(AI)がもたらす未来
- L6. [ディベート]電子書籍 vs. 紙の本
- L7. 世界中でこんなに食べられているそば
- L8. 急減しているスズメやミツバチからの警告

[Unit 3]

- L9. アウンサンスーチー：民主主義と平和のために
- L10. 人間の記憶力増強のための5つの方法
- L11. 現代社会の諸相にみる「一瞬」の重み
- L12. 情報化社会に不可欠なメディア・リテラシー
- L13. オバマ大統領の広島訪問：核なき世界のために
- L14. Englishes：世界で使われているさまざまな英語

なお、本課の題材に加えて、〈Reading〉(読み物教材)として、『I』で1編、『II』で2編、『III』で2編を加えています。

以上、『MY WAY』の題材の全体を列挙しましたが、これらの特長をまとめると、次の3つになります。まず、その数です。『I』から『III』までを合わせると、〈21 + 22 + 34〉で合計77編の題材を揃えたことになります。次に、分野が多岐にわたっていることです。取り上げている国や地域が多く、テーマも多様です。最後に、ことばに関する題材を多く取り上げていることです。これにより、英語教育が言語教育であることが鮮明に打ち出されています。

5. おわりに

最後に、『MY WAY』が生徒のみなさんに伝えるメッセージへの思いと工夫に関して補足して、本稿を閉じます。

何事も最初と最後が肝心です。これが、『MY WAY I・II・III』の本文の最初の文と最後の文に如実に表れています。以下は、『I・II・III』の最初の課の最初の文〔上〕と最後の課の最後の文〔下〕です。

『I』:

- * Everyone has a name.
- * Her (Potter's) books and her strong spirit to protect the environment will remain in people's minds.

『II』:

- * We have a lot of ways to communicate.
- * It is the younger generation that can keep the traditions alive.

『III』:

- * A variety of greetings are used in the world, and they have interesting meanings.
- * Be confident in your English and use it to communicate with people in the world.

ご覧のように、『MY WAY』全体では、『I』の冒頭の名前論で生徒の個性やアイデンティティーを喚起し、『III』の最後の文で、英語に自信をもって世界の人々と交流しようと呼びかけています。このような姿勢は、各課やセクションの最初と最後の文でも出すようにしました。本文の文章作成上のこのような工夫も、『MY WAY』の特長と言えます。

『VISTA English Communication I・II New Edition』 —「民間試験」への移行を見据えて—

[VISTA] シリーズ代表著者

昭和女子大学 金子 朝子



1. はじめに

改定版VISTAは、繰り返し学ぶことで英語の基礎・基本をしっかりと定着させることを第一の目的とした教科書です。語彙や文法等、個々の事項を知っているという「宣言的知識」だけに終わるのではなく、それを様々な練習を通して「手続き的知識」としてコミュニケーションに使える英語を身に付けることを目指しています。

2024年度から全面实施となる『新大学入学試験』に備えて2020年度から移行期間に入り、従来型のマークシート式試験と民間試験が併存されます。すでに民間の検定試験を活用したり、近く移行を計画したりしている高校もあることでしょう。VISTAは、学びやすく教えやすい教科書として、多様なレベルの英語力を持つ生徒の指導に対応できる教科書です。

2. 「4技能」の基礎固めを

これまでに培ってきた英語力を活用して、4技能の基盤をしっかりと固めることをVISTAは目指しています。各課の初めに、写真と簡単な「聞く」導入問題を置きました。教科書にある豊富な写真も教材として活用し、生徒のレベルに応じた4技能の指導が可能です。例えば、本文の5～6枚程度の写真を活用して、教師がその中の1枚を英語で説明し、生徒がグループごとにどの写真の説明かを当てる「聞く」活動や、グループで1枚の写真を選んで説明し、どの写真の説明かを聞いている生徒が当てる「話す」活動も加えられます。iPadなどを利用して、まとめた説明をプロジェクターで映写すれば、「書く」活動や「読む」活動ともなります。このように、VISTAは、4技能の基礎固めのために、生徒が必要とする技能を中心とした練習を行うためにアレンジがしやすい教科書です。

3. 5領域の「やり取り」と「発表」

(1) 「やり取り」

相手の話に対して、即興で受け答える「やり取り」の力が十分ではないという調査結果を得て、2017年度版小・中学校の新学習指導要領では、「話す」指導が「やり取り」と「発表」の2領域に分けられました。「やり取り」は、コミュニケーションの中核になるもので、「大学入学共通テスト」に備える意味からも重要で、相手の話を聞きながら自分が言いたいことを伝える練習が必要です。例えばVISTAには、「今度の土曜日にやってみたいことについて、対話してみよう (VISTA I, L.5 PRACTICE! 3)」という練習があります。この課で学ぶ文法事項である不定詞を使って文を作り、架空の「やり取り」をする練習の後、本当に土曜日にしたいと思っていることを話したり、土曜以外の曜日について聞いたり、更には、相手の答えについて詳細を訪ねたり、と発展的な練習が可能です。

「やり取り」は話し言葉だけでなく、書き言葉でも行われます。その練習には、言葉の機能に注目したUSE ENGLISH!のコーナーが役立ちます。「感謝の気持ちを伝えよう (VISTA II)」では、お礼のカードのサンプルを読み、生徒がお礼のメッセージを加えます。クラスをグループに分け、半数のグループがそのお礼状に対する返事を書く活動や、実際に年度末にALTへのお礼の寄せ書きをする活動等を加えると、書き言葉でのやり取りにも興味を高めてもらえるのではないのでしょうか。

(2) 「発表」

「発表」は、自分の気持ちや考えをある程度のまとまった英語で話す活動です。USE ENGLISH!「図表を説明しよう (VISTA II)」では、アンケートの結果を発表するためのレポートを作成します。ここでは、



既に作成されている結果の表を見ながらレポートを完成しますが、聞き手がよく理解できるように、表を示しながらスクリプトを参考に口頭で説明してはどうでしょう。更に「結論をまとめよう(VISTA II)」では箇条書きにしたある提案を読み、それを口頭で説明する英文にまとめる活動があります。元の提案とは違う提案をするグループと意見交換するなどして、ディベート活動へとつなげることもできるでしょう。こうして、まずは身の周りのことに関するまとまった内容の話から議論へと発展させることが可能です。高等学校新学習指導要領では、『論理・表現』でディベートが扱われます。その基礎となる意見交換は、VISTAの活動に入れることもできるでしょう。

「やり取り」と「発表」は、双方向と一方向の話であるという違いに加え、その場に応じて定型文や慣用句を用いて円滑にコミュニケーションを進める技能と、どのように内容を正確にわかりやすく伝えるのかに重点を置く技能との違いもあります。どちらの習得のためにも、場面・聞き手・読み手を変えて何度も繰り返し練習することが欠かせません。生徒が特に興味を持つ題材を見つけて、是非、試してみたいものです。

4. 入試改革と2018年度高1生からの 大学入試選抜

2020年度から、国数の記述問題が導入され、英語では4技能を対象とする「大学入学共通テスト」が始まり、受験生の「学力の3要素」、すなわち、知識・技能、思考力・判断力・表現力、そして、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度の3点について、多面的・総合的に評価する入試へと転換されます。加えて、2018年度の高校1年生が該当する2020年度の一般入試の個別選抜からは、調査書の記述内容の改善等も行われ、一般、推薦、AOの入試区分を見直し、すべての区分で学力の3要素が適切に評価されるように改訂の予定です。

また文部科学省では、大学入学者選抜の改革として、高大接続のために多面的で総合的な評価を導入するために高校での学習履歴を大学と共有する、つまり、定期テスト、授業アンケート、模試の振り返り、資格検定の結果、学内外での活動などすべての学習記録を活用しようとする動きもあります。入学試験だけではなく、高校1年から3年までの学びや経験

のすべてが、入試選抜に影響することになるでしょう。

5. 学習習慣を身に付ける

こうした状況の中で、英語力をしっかりと身に付けるためには、高校での日々の学びの充実が重要です。VISTAは生徒に興味を持ってもらえる題材内容を揃えることに力を入れています。そして、各セクションには一目で何を読み取って欲しいかがわかる工夫としてReading Pointを付してあります。また、その課で身に付けたい文構造や事項にはマークをし、前課での既習事項にも既出ページが示してあるので、自分で予習・復習をする学習習慣を身に付けるのに役立ちます。「Look and Learn 文法のまとめ」の基本的で分かりやすい解説や確認問題をこなすことで、一つ一つ「わかった」という成功体験を積み重ね、それが、継続して学習する習慣に繋がることを期待しています。

6. おわりに

VISTAは、英語を学ぶ中で思考力・判断力・表現力を培うことができるように、PISA型の深い読みも大切にしています。話者や書き手が伝えたいことは何かを確実に捉えるために、なぜその語句や表現を用いたのかを考える、自分が持っている知識と結びつける、「もし~なら」と仮説を立てて予測するなど、題材内容をより深く掘り下げます。新学習指導要領は、2020年度の小学校の英語活動と英語授業の全面实施に始まり、2021年度の中学校全面实施に続いて、2022年から高等学校で年次進行の実施となり、2024年度の『新大学入学試験』へと向かいます。

高校卒業後社会で活躍する生徒も大学進学を目指す生徒にとっても、加速的に変化をし続けるIT時代に、世界中の様々な情報を素早く察知して、自らの判断によって行動できる自立した人材へと成長するためには、英語でのコミュニケーション力が欠かせません。東京オリンピック、そしてその先の世界を見据えて、VISTAで学ぶ生徒たちが、自分に自信を持ち、自分の思いや意見を明確に伝え合うことができる人材へと成長することを期待しています。

『CROWN English Expression I・II New Edition』 — Scaffolding という考え方に支えられて —



元電気通信大学 松原 好次

1. はじめに

『クラウン英語表現 I・II (CROWN English Expression I・II)』改訂版の編集完了に当たり、どのような基本方針に沿って、二冊の教科書が出来上がったのかを振り返ってみることにします。その際、『改訂版・クラウン英語表現 I・II』が、いわゆる「4技能(5領域): Reading, Listening, Writing, Speaking (発表・やり取り)」の向上に、どのような形で寄与できるかを述べたいと思います。

2. 改訂の基本方針

まず、改訂の基本方針に目を通していただきたい。

『改訂版・英語表現 I』

1) 重要文法項目の記述を精密化する。

内容の濃い表現を行う(つまり、深く伝える)ためには相応の言語形式が不可欠であるという観点から、重要文法項目の記述を格段と詳しく改める。

2) 文法学習と表現活動の緊密性を強化する。

文法・語法の学習過程で、生徒一人ひとりにとって興味・関心のあることを、適切な場面設定のなかで表現する経験の積み重ねが重要だと考え、いくつかの点で、形式・意味・使用を統合するための改善に取り組む。

3) 高校生の心に訴える題材を精選する。

文法・語法の学習は、ややもすれば味気ないものになりがちなので、生徒の知的好奇心を掻き立て、しかも芯のある題材の精選を心がける。

『改訂版・英語表現 II』

1) 「ことばへの気づき」を促す文法項目の提示

重要な文法項目の一つ一つを「ペア文による対比」で提示し、含意の微妙な差異に学習者が気づく手助けをする。そして、そこで得られた「ことばへの気づき」を外国語による表現活動の起点とする。

2) 表現活動の「流れ」の可視化

パラグラフ、エッセイ、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートについて、各々に特徴的な構造を学習者に明示し、英語による表現の後押しをする。

3) 「批判的言語認識」を促す題材の精選

言語(外国語としての英語)を学ぶ過程で、自分自身や他者・社会を客観的に見つめ直す契機となるよう、高校生の知的好奇心を掻き立てる題材を選定する。そして、言語は社会の姿を写す鏡であると同時に、その使用が他者や社会に影響を及ぼしうるという点に気づくよう手助けをする。

3. Scaffolding という考え方

次に、上記基本方針の中でアンダーラインの引かれた部分に着目していただきたい。すると、両者の基本方針に“scaffolding”という考え方が流れていることに、お気づきかと思います。「足場作り」という訳語が付けられている scaffolding という考えは、近年、再評価の高いヴィゴツキー(旧ソヴィエトの心理学者: 1896-1934)の唱えた学習理論(「発達最近接領域」)から導き出されました。「子ども(学習者)がひとりでできるレベル」と「誰かの援助を得ることによってできるレベル」との間の発達領域に注目して、教授法や教材を設定していこうとする考え方です。子ども(学習者)が援助なしに独力で問題解決できるようになることを最終目標とします。

なぜ編集委員会が、教科書の構成や内容を考えていく際、scaffolding に依拠したかと言いますと、「外国語で表現することは学習者にとって易しいことではない」という認識があるからです。10年ほど前、米国の高校でアクティブ・ラーニングの授業を見学した際、授業中、とまどっている生徒が予想以上に多く、驚かされました。これは、あくまでも私の個人的感想に過ぎませんが、この種の学習形態を前面



に出す場合、生徒の母語(英語)で行う場合でも様々な準備(教材および指導法)が必要だと思いました。まして、外国語で発表したり、やり取りしたりすることは、どの段階においても困難を伴います。そこで、「足場作り」という考えを根底に置いて、編集作業にあたったというわけです。

4. 表現活動を後押しする“きめ細かい手立て”

『改訂版・クラウン英語表現Ⅰ・Ⅱ』は、文法、機能表現、パブリック・スピーキングの学習を表現力の育成に結びつける様々な工夫が凝らされた教科書です。ここでは紙面の関係上、『英語表現Ⅰ』のExpress Yourselfという表現活動に限って、“きめ細かい手立て”を具体的に紹介します。

見開き2ページ構成のExpress Yourselfは、『英語表現Ⅰ』を通して各課末尾に10レッスン配置されています。ここで生徒たちは本課で学んだ文法項目と「発表に必要な表現」を活用して、スピーチやプレゼンテーションの原稿作成をすることになります。Listening→Writing→Speakingという有機的な流れを通じた表現力の育成がねらいです。

Lesson 9(仮定法)の末尾に置かれたMedical Technologyを例に、Express Yourselfでスピーチの基礎作りがどのようになされるかを確認することにします。

(1) Input : 新しい医療技術の可能性についての文を聴きながら、内容的に重要な語句を空所補充する。本課の文法項目である仮定法はスクリプトに含まれているが、Inputでは文法形式に焦点を当てず、あくまでも内容に集中させる。Focus on Formという指導法を採用することも可能。

(2) Output : 音声で得た情報を基に、そのトピックについてのスピーチ原稿を用意する。(1)で得た情報を空所に補充するだけで完結する容易な形式。このパラグラフには、仮定法を含んだ文、および、後述の「発表に必要な表現」と「つなぎ言葉」が使用されている。空所補充の後、生徒たちは末尾に置かれた文(I hope that _____)の下線部を考える。

なお、Input / OutputではDictoglossという指導法の活用も可能。つまり、あるまとまりのある文章を聴く(Listening)→内容についてメモをとる(Writing)→メモを頼りにペアまたはグループの仲間から得た情報を追加する(Speaking)→元の文章を復

元する(Writing)という流れ。

(3) Tool Box : 「発表に必要な表現」と「つなぎ言葉」が例示されている。このレッスンでは、「聞き手の考え・感想を求める」(What do you think about ...?など)と「希望を述べる」(I hope that ...など)、および「強意・驚き」を表すつなぎ言葉(In fact, ...など)が例文で示されている。

(4) TRY : 以下の指示文でタスクが設定されている。What kind of technology do you think is playing an important role in our society? Find one example of such technologies, using the Internet, and write a draft for your presentation.

そして原稿作成がスムーズに進むように、以下のような展開上のヒントが付されている。

- ①導入：社会における科学技術の役割について、どう思いますか。
- ②メインアイデア／具体例：～は…において重要な役割を果たしています。～のおかげで、私たちは…することができます。
- ③結び：～が、ますます発展することを期待しています。

上記の日本語に該当する英語表現は、Outputや「発表に必要な表現」「つなぎ言葉」で提示済み。また、原稿作成時に役立つように、Words & Phrasesというコラムも置かれている。

以上の手順に従って、Medical Technologyの「内容」に注目させると同時に、本課で扱った「言語形式(仮定法)」が、医療技術の可能性を語るという文脈で使用されていることに気づかせることができます。さらに、スピーチ(あるいはプレゼン)の構成(論理展開法)が明示されていますので、学習者は大きな負担なくスムーズに到達目標の表現活動(writingとspeaking)に移行できます。

5. おわりに

以上の他にも、scaffoldingという考えに依拠した“きめ細かい手立て”が『改訂版・クラウン英語表現Ⅰ・Ⅱ』には散りばめられています。学習者一人ひとりが、素材を基に思考し、判断したうえ、英語で表現する——。その際の「足場作り」に、『改訂版・クラウン英語表現Ⅰ・Ⅱ』が、お役に立てるものと確信しています。

『MY WAY English Expression I・II New Edition』 —「大学入学共通テスト」に対処する授業の展開方法とテクニック—



同志社女子大学 飯田 毅

1. はじめに

昨年12月に「大学入学共通テスト(新テスト)」の試行調査の問題が公表されました。問題の質と量、出題形式は今までの試験問題とかなり異なります。英語は2020年度から「民間の試験」を併用する試験に移行します。そこで、本稿では本改訂版を使って産出的(productive)な能力であるspeaking力とwriting力をどのように育成していくかを述べます。

2. 「新テスト」の背景と授業

2018年1月の時点で、高校の新学習指導要領の詳細は発表されていませんが、「英語表現」という科目は「論理・表現」に変わります。「論理」とは、おそらく「言語技術(language arts)」教育の影響です。現行の教科書で、それと最も関係が深いのはparagraph writingです。簡単に言えば、個々の英文との関係が「論理」です。今回の改訂および大学入試の変化の背景にあるものは、グローバル化の進展、AIの発達、そして、PISAの結果です。この3つが新大学入試の「思考力・判断力・表現力」という言葉に影響を与えています。

「思考力・判断力・表現力」を問う問題は必ずしも「民間の試験」にだけ反映されているものではありません。普通の試験でも広い意味で「思考力・判断力」を測定できます。「民間の試験」は通常speakingとwritingを評価していることから新大学入試に採用されるのです。マークシート試験でも工夫次第で「表現力」を問う試験は可能ですが、実際に英語を話したり、書いたりする試験の方が妥当性が高いと言えます。試験のためではなく、日々の授業で産出的技能を伸ばすために生徒が表現したくなるような授業を展開し、生徒とともに取り組むことが大切です。

3. 改訂版の特徴

本教科書の改訂版の特徴を産出的技能との関係から3点取り上げます。

(1) 文法・構文解説

本改訂版では、生徒が目標となる文法解説の本質を捉えることができるように、Pointの日本語をできるだけわかりやすく、かつ端的に説明するようにしました。ここで注意したいことは、4技能が評価されるからといって、文法・文型の指導の重要性が減少することはありません。むしろ産出的活動を行うためには、その基礎として文型・文法の指導の重要性が増した、と言った方が適切です。英語で表現するためには、文法・文型の基礎なしでは表現できないからです。

(2) Communication Activity (CA) 活動

本改訂版では、『I・II』とも巻末にCA活動を入れました。その活動のねらいは今まで学習した語彙や文法事項を活用して、インタビューや情報交換を行い、実際に英文をまとめることにあります。CAは学習した文法事項に関連しており、学んだ文法事項を使って生徒が表現する機会を増やしていくことを意図しています。この活動は産出的活動に直接関係しています。

(3) Paragraph Writing、Discussion、Debateの改訂

改訂版の『I』では各Lessonで文レベルの練習に続いて、Unitごとに3文のParagraph writing、Project work、そして、改訂版の『II』では本格的なParagraph writing、Discussion、Debateと続きます。今回、より使いやすいように教科書の内容を改訂しました。テーマは同じですが、生徒が取り組みやすいように英文を書き換えました。『II』のそれぞれの活動は独立していて、いつでも使えるようになっています。『II』の最初の段階でParagraph writingを



扱うこともできます。むしろ最初に Paragraph writing を行い、英文の論理的な表現方法を学んだ方が生徒は取り組み易いかもしれません。

4. 産出的技能の授業展開

産出的活動を行うためには、今までの授業に加えて以下の3点を行うことが必要です。第1に、毎回の授業の中で、どんな小さなものでもよいですから、生徒の自己表現活動を目標として取り入れ、評価することです。生徒の実態に応じて、意図的・計画的に授業の中に自己表現活動を配置することです。文法・文型の理解が重要であることは言うまでもありません。ただ、ともすると「英語表現」の授業は教師の文法解説が中心となる傾向があります。従来行われてきたように、生徒は学習する内容を予習の段階で単語を調べ、練習問題を予習し、教師は目標となる文法事項を解説して終わってしまうのではなく、毎回の授業で生徒が自己表現をする活動を取り入れ、その活動を評価する観点を入れることが大切です。例えば、Useを生徒の自己表現の場として捉え、生徒が目標言語材料を使って自己表現できたかどうかという評価の観点を取り入れてみてはどうでしょうか。日々の授業計画でUseの活動を時間内に組み入れることができない時でも、文法・文型解説が終わってからUseを取り上げてよいでしょう。毎回の授業の流れは「文法・文型の学び」→「練習問題演習」→「Useを使って表現」という指導過程を踏むのではなく、Useから入り、表現できないことを前提に文法・文型を学ぶという柔軟な指導過程も必要です。

次に、生徒に文レベルを超えた談話 (discourse) レベルで話したり書いたりするように促すことが重要です。そのためには、生徒が表現できるまで待つことも大切です。すぐに表現できる生徒もいれば、時間が必要な生徒もいるからです。生徒は通常、文レベル中心で英語を学んでいきます。しかし、実際表現しようとする、単語レベルから発話を始めることが多いでしょう。場合によっては単語だけの期間が長いかもしれません。たとえ単語レベルであっても、異なった単語を言うと、単語同士の関係が現れます。何回か練習していくうちに、文レベル、そして、談話レベルの表現に変わっていきます。例えば、書くことに関して、毎回3行文を書かせることが目標であれば、毎回書く時間を確保することで生徒は必

ず書けるようになります。

最後に、当たり前ですが、教科書の Project work、Discussion、Debate等の活動を実際に授業で行うことです。私のクラスの生徒にはできない、と考えるのではなく、まずはやってみようとする姿勢が大切です。もちろん最初からうまくいくことはありません。うまくいかなかったら、なぜそうなったのかについて、教師ばかりでなく、生徒自身にも考えさせることが大切です。生徒はほぼ無意識的に母語を習得してきたことから、外国語の意識的な学びについてあまり考えることがないでしょう。授業の中で、授業外でどのような学びが必要であるかを考えさせる絶好の機会です。

5. 3つのテクニック

上記の3点を実行するには、教室内学習と教室外学習の関係の再検討が必要です。生徒に表現させるためには、内容が必要です。その内容はすぐには出てきません。生徒の日常生活の中から取り出すことが大切です。その意味で、教室内で豊かな学びを実現するために、教室外で何をするかを明確にすることが大切です。また、生徒の表現に対して正確さ (Accuracy) を求めすぎず、流暢さ (Fluency) への配慮が必要です。質より量に配慮する指導です。最後に意図的・計画的な教室内の言語計画 (Translanguaging) が重要です。生徒が表現したいことを日本語で考え、英語で書き、その英語をクラス全体で読み、グループで日本語を使って議論し、それに対する個人の意見を英語で書き直し、英語で自分の意見として発表する。このように生徒の英語使用を計画的に配列することで、英語の表現力を身につける授業方法です。「英語の授業は英語で」ではなく、プロセスに配慮し、英語で表現する力を養うことが重要ではないでしょうか。

6. おわりに

大学入試がどのように変化しようとも英語教育の本質は変わりません。生徒が表現したいと思う日々の授業に本教科書が役立てれば、と願っています。



『SELECT English Expression I New Edition』 —「4技能試験」を見据えて—



『SELECT 英語表現』代表著者
成城大学 井上 徹

1. はじめに

『SELECT English Expression I』(以下、『セレクト表現』)は、中学校で学んだ基本的な英文法を学び直し、さまざまな活動を通して、英語の表現力と発信力を高めることを目的とした「英語表現I」の教科書です。平成26年度に初版が刊行されて以来、全国の先生方から暖かい励ましや建設的なご意見を頂戴しながら、少しずつ改良を重ねてきました。改訂版(平成29年度版)では、2020年度から始まる「大学入学共通テスト」や今後移行する民間試験に対応する題材や内容を意識して、この教科書をご使用になる先生や生徒の皆さんにとってさらに使い勝手のよい教科書となるように心がけました。

2. 改訂版のポイント

私たち『セレクト表現』編集委員会は初版を作る際に、学習指導要領で示されている総合的・統一的活動を通じて、生徒の皆さんが英語を「学ぶ」ことと「使う」ことを並行して行い、学んだ英語が役に立つと実感してもらえるように細心の注意を払いました。この立場は今回の改訂版でも変わりありません。以下では、今回の改訂のポイントを説明します。

各レッスンの構成は、本書の最大の特徴である①イラストで視覚的に英文法の基礎的な項目を学ぶ**セレクト英文法36**、②学んだ文法項目を確認する**瞬間チェック**から各課のテーマに沿った問題を解きながら文法項目の定着を図る**Gトレーニング**、学んだ文法項目を使って会話形式で自分のことを発信する**Speak Up!**へと続く系統的な反復学習、そして③場面にあった発信型の表現を選ぶ**場面でGo!**になっています。

改訂版では、初版の1レッスン見開き2ページの構成を保持しながら、小さな改訂を積み重ねました。

まず、扱う題材に最新のものを取り入れ、写真と英文を新しいものにしました。具体的には、「はやぶさ2の挑戦」(Lesson 11)という最新の内容を取り入れています。また、見返しのトリックアートの絵を新しいものにし、宇宙食(Lesson 2)、Hello Kittyとアイドルグループ(Lesson 5)など、多くの写真を新しいものにしました。これらの変更に合わせて、**イントロ英会話**の英文や欄外の**なるほどザ☆ワード**の説明を調整しました。さらに、最新的话题を提供するために、練習問題の英文を一部変更しました。

取り扱う文法事項に関しては、初版で巻末の**文法のまとめ**にリストされていた(as ~ as...)の同等比較を含む例文を「セレクト英文法36」の**プラス α** に追加しました。また、**場面でGo!**の問題を一部差し替え、正解を選びやすくなるように配慮しました。さらに見やすく、わかりやすく、学びやすくするための工夫として、デザインや活字を一新しました。

3. 本教科書の特徴

この項では、『セレクト表現』の特長と使い方をご紹介します。

(1) 文法項目をイラストで図解

2単位の教科書であることを考慮して、何百とある英語構文や文法項目の中から、これだけは覚えてほしいという文法事項を36個に厳選し、**セレクト英文法36**というタイトルで各レッスンに2つずつ配置しています。楽しみながら英文法の感覚が理解できるように、基本的な文法項目のイメージをイラストでわかりやすく解説しています。また、「セレクト英文法36」に関連する項目を、**プラス α** として項目ごとに1~3つ配置しています。

(2) 豊富な問題でセレクト英文法の定着をサポート

学んだ文法項目を実際に使えるようにするためには、繰り返し学習することが欠かせません。学んだ



英語を生徒にすぐに使わせ、自分にもできるという安心感を得られるように、「セレクト英文法36」のあと、**瞬間チェック**という2択または3択問題を置いています。続いて、各レッスンの文法項目とテーマに沿った練習問題**Gトレーニング (Gトレ)**に取り組むことで定着を図ります。なお、『セレクト表現』の各レッスンは、世界の食文化、スポーツ、生き方、芸術、ご当地など、多彩なテーマを取り扱っており、Gトレの問題文はテーマに沿って作られていますので、問題を解きながら、現代社会への関心を高められるようになっていきます。

なお、「Gトレ」には4レッスンごとに**Gトレ^{プラス}**を配置し、問題を解きながら各課で学んだ文法を定着させます。万一学んだ文法項目を忘れていても、傍注として関連するレッスンの番号が示されており、すぐに本課に戻って復習できるようになっています。さらに、本課で扱った文法項目は、高校生が日常生活でよく使う表現として巻末に**文法のまとめ**として掲載しています。

本課では上記の練習問題のほかに、左ページの冒頭で**イントロ英会話**を配置し、会話の中でターゲットとなる文法項目を使用した表現を導入しています。また、右ページの最初は、写真を見ながら内容に関する英文を選ぶTOEIC形式のリスニング問題**Let's Listen**を置きました。3つの英文のうち必ず一つには「セレクト英文法」で学んだ項目が含まれています。また、各課の最後には、学んだ文法項目を利用して、会話形式で自分のことを英語で表現する**Speak Up!**を配置しています。下線部には表現例を示し、欄外にはそのまま使える語句をまとめた**toolbox**を置くことで、英語の苦手な生徒でも容易にアウトプットできるようになっています。

このように豊富で系統だった練習問題で、効率的な英文法の学習が可能です。

(3) 場面にあった表現を2択問題で学ぶ

「Gトレ」の後には、発信型の英語表現を学ぶ**場面でGo!**を用意しました。このコーナーでは、2つの文を見て、ヒントを参考に場面に応じた適切な表現を選びます。それぞれの表現は、各レッスンの文法項目に関連しているものになっており、生徒にとって紛らわしい英文法の使い分けを学んだり、日本語を直訳してしまうと誤解を招く表現を学んだりして、英語と日本語との違いにも注意を喚起しています。

(4) 「つなぎ言葉」のふしぎ発見

まとまった量の英文を話したり書いたりするとき、に欠かせないのが、and, but, becauseなどのつなぎの言葉です。つなぎ言葉には、語と語、句と句、文と文を結びつけ、文章全体にスムーズな流れをつくるという重要な役割があります。**つなぎ言葉ランキング**では最も使用頻度の高い「接続詞トップ10」をあげ、わかりやすい例文と直感に訴えるイラストでその機能と用法を紹介しています。ふだんにげなく使っていた「つなぎ言葉」のふしぎを発見して、表現力のアップをねらいます。

(5) 総合的な言語活動

『セレクト表現』では、学習指導要領の趣旨を生かした総合的な活動として、**Speaking Station**と**Daily Conversation**を設けています。「Speaking Station」は、読んだり聞いたりしながらテーマに沿った情報を取り入れ、自分の考えをまとめ、自分の意見を発表するアウトプット活動です。スピーチや発表に必要な表現をワークシート形式で学びながら、パラグラフ・ライティングと発表の練習を行います。このような練習は、英検などの民間試験のライティングやスピーキング、思考力・判断力・表現力を問う2020年から始まる大学入学共通テストにもさまざまな形で役立つことでしょう。「Daily Conversation」では、本課で学んだ文法事項を使って、買い物、レストラン、道案内の場面で多用される基本的な会話表現に慣れ、実際に使えるようになることをねらいとしています。すでに知っている英語の知識をどのように効率よく活用するかを会話形式で紹介し、それぞれの場面に即した実用的で発信型の表現をまとめています。

4. おわりに

冒頭でも触れたとおり、本書はどの生徒にも学びやすく、先生方にも教えやすいユーザーフレンドリーな教科書をめざして編集されたものです。本書で取り扱っている文法項目の多くは基本的なレベルですが、上手な自己紹介や発表の仕方、論理的な英文の書き方など、実際に英語を使用する場面でのコツがつかめるようになっています。また、今後移行する民間試験にもバランスよく対応しています。本書で学んだことが、これからの英語学習を支える大きな力になると信じています。

『SELECT English Conversation』 —『英語会話』とこれからの「新大学入試」—

『SELECT 英語会話』 代表著者
元拓殖大学 北出 亮



1. 『SELECT 英語会話』と「新大学入学試験」

現在進められている教育改革の一つに、約25年以上続いてきた「センター試験」に代わって、「新大学入学共通テスト」の導入があります。実際には、今年の4月入学の高校1年生が受ける2020年度の大学入学試験から始まります(2023年度までは移行期間として、大学入試センターが作成する問題と民間テストとの併用)。特に英語科については、従来の2技能(「聞く」「読む」)の試験に加えて、今までの試験では評価がしにくかった「話す」「書く」試験を新たに加えるために、民間テストを利用するという新しい形の試験となります。大学入学試験の受験のためにも、また資格試験としての民間試験の受験に対応するためにも、この「話す」「書く」技能は、今まで以上に必要性が高まって参りました。

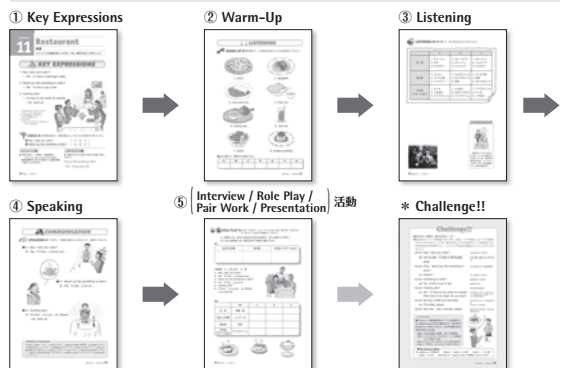
現在行われている民間試験におけるSpeaking Testでは、文章のより正確な音読や、イラストを見ての状況説明、文章を読んでその内容について自分の考えを述べる、などの力が求められています。『SELECT 英語会話 (SELECT English Conversation)』では、いろいろなテーマごとに、会話表現の基礎表現を徹底して学んだあとに、そのテーマに即した即興的なやり取りに対応できる表現を育成するInterview活動やPair Work活動に加えて、みんなの前で説明や発表するPresentation活動が用意され、自分の伝えたいことを何とか駆使して相手に発信できる英語表現の基礎を学習していきます。そしてまた更に、Presentationを行なう際には、事前に相手に伝えたい内容をわかり易くまとめるWriting活動も加えることができます。「話す」活動と「書く」活動は、なかなか短期間で習得することは難しいものです。『SELECT 英語会話』の会話の基本パターンは、使用頻度が高く、すぐに使える表現が選ばれていますので、授業の活動

の中で繰り返し、繰り返し使うことで、英語が苦手な生徒でも知らず知らず「話す」ことに対する自信がついてくることでしょう。長年全国の多くの先生方から支持され続けている『SELECT 英語会話』の「5段階ステップ方式」について、具体的に説明することにします。

2. 編集方針

現在使用されています『セレクト英語会話』は、今から約20年前に初めて学習指導要領に科目として「オーラル・コミュニケーション」が登場した1996年初版の『SELECT Oral Communication A』から始まり、この間、『セレクト』の基本コンセプトとして長年教育現場で大きなご支持を頂いてきた「Key Expression方式」「5段階ステップ式」「コミュニケーション活動」「ワークシート」などの指導法を、改訂の度ごとに受け継いできました。そしてまた、この『セレクト英語会話』でも、「授業が進めやすく、教えやすい」「楽しく学べて力がつく」「基本表現を繰り返し、段階的に学ぶので授業がしやすく達成感がある」「教材が充実して評価がしやすい」という基本的な編集方針に、さらに磨きをかけて編集されています。

3. 「5段階ステップ方式」





セレクトが全国の先生方に支持されていることの一つの大きな理由は、各レッスンが全て、「5段階ステップ方式」の活動パターンに基づいているという、使いやすさにあります。この方式が、特に英語が苦手な生徒にとってなぜ使いやすいのか、この方式の基本パターンを見てみましょう。

① Key Expressions

まず、このレッスンの基本表現となる、3～5つの会話文が提示されます。この基本会話文が、この課で生徒が覚える「基本表現 (Key Expressions)」となり、この「基本表現」を生徒の記憶に残すために、これ以降のステップ活動の中で、最も効果的な活動を通して繰り返し何回も使っていくことになります。

② Warm-Up

次に、この「基本表現」を使うにあたって、よく使われる語句を確認していきます。音声でその語句を含んだ短い文を聞かせて、その文の中に教科書のイラストで提示されているどの語句が入っているかを、クイズ形式で確認していきます。

③ Listening

次に、①で提示された会話の中に、②で確認しました語句を組み込んで会話が行われます。生徒は、その会話を聞いて、それに該当する項目に○をつけていきます。これは、表形式になっていて、答えも各項目別に選択方式になっていますので、解答しやすく、結果として何回も「基本表現」を繰り返し聞くことになります。

④ Speaking (Communication)

次に、①の会話文の内容を自分のことに置き換えて、自分の立場で応答する練習をします。その答えを出すにあたっては、前のWarm-Upで確認した語句や、脚注にあるWords & Phrasesにある語句なども参考にしながら、自分に合った語句を探すとよいでしょう。

⑤ (Interview / Role Play / Pair Work / Presentation) 活動

ここでは、会話の内容によって、その内容にもっとも適した3種類の異なった活動 (Interview, Role Play, Pair Work) が用意されています。

生徒同士で、①の会話文を使って、Interview / Role Play / Pair Workなどの活動を行いながら、その結果を、用意されているワークシートの表に記入しておきます。これも表形式でまとめやすくなって

いますので、記入したことを、最後にPresentationのパターンにまとめて発表すれば完成です。

以上、「5段階ステップ方式」によるこれらの簡単な活動を通して、何回も同じ「基本表現」を聞いたり話したりすることになりますので、必然的に会話文そのものを記憶する定着率も高くなります。

* Challenge!!

さらに、時間的に余裕がある場合には、これらの「基本表現」が使われている実際の場面の会話文が用意されていますので、クラスの生徒同士で、お互いにスキットの練習をすることもできます。また、この場面はDVDにも収録されていますので、臨場感を持ってその場面を確認することもできます。

4. 「亜紀と拓の留学日記1～4」

学習指導要領にある「海外での生活に必要な基本的な表現を使って会話する」という項目に対応して、高校生にとってはいちばん可能性が高い「留学」ということテーマに「亜紀と拓の留学日記」の物語を作りました。また、「前見返し」は空港の到着ゲートの場面、「後ろ見返し」はお別れパーティの場面として使用しましたので、アメリカ入国からホストファミリーとの生活、学校での勉強、休日の観光、そして帰国のためのお別れパーティまで留学全体の流れがわかるように工夫致しました。

基本的な会話表現は、イラストで描かれた留学期間の様々な場面の中で、実用的な会話として、本文の「亜紀と拓の留学日記」の中で47例、前後の「見返し」で25例、合計72例の対話文としての会話表現が使われていることになります。

5. おわりに

最後に、従来から変わらない「使いやすく、教えやすく」「生徒が楽しく学べて、積極性が身に付く」「基本表現を繰り返すので、表現が無理なく身に付く」「評価がしやすく、教材が充実」などの基本的な考え方に基づくこの『セレクト英語会話』の教科書に一貫して流れる編集方針は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」です。「英語会話」は、文法的、音声上の完璧さを目指すのが目的ではありません。恥ずかしがらずに積極的に話し、発表し、聞くことが最も重要です。英語を話そうとする生徒を励まし、評価し、自信を持たせる指導を先生方をお願いする次第です。

2018年度 センター試験の 分析と対応



渡辺 聡

東京学芸大学附属特別支援学校

筆記

1. 全体的な傾向

今年のセンター試験 [筆記] でもコミュニケーション能力と読解力を試す出題がなされた。例年通り基本的な問題が多かった。設問形式では、昨年までの第3問Aの対話文完成問題がなくなった。その分、第2問Cの1問あたりの配点が増え、第4問Bでは設問が1つ増えた。平均点は123.75で、昨年度の123.73とほぼ同じであった。総語数は昨年度とほぼ同じ約4,300であった。

コミュニケーション能力をみる問題としては、
第1問A：単語をきちんとした音で発話する能力
第1問B：単語を正しいアクセントで発話する能力
第2問C：ある発言に対し、適切な応答を考える能力
第3問B：発言の内容を要約する能力
が例年通り求められている。

また読解力では、
第3問A：パラグラフ単位で文章の構成を論理的に思考する能力
第4問：グラフや図表、説明文を参考にして文章を正確に読み取る能力
第5問：長文の日誌を読み、内容を正確に把握する能力
第6問：論説文の流れを正確に追い、各パラグラフの主旨をつかみながら長文を読み取る能力が試される。いずれも文章の全体的な流れをつかんだ上で、的確な情報を読み取る日頃の学習姿勢が問われる。

2. 具体的内容分析

<第1問>

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A 発音 (6点：解答数3)

基本的な単語の発音 (母音が2問、子音が1問) を問う問題。昨年度同様、スペリングが同じでも発音が異なるものが出題されたが、スペリングがすべて異なるものの出題も1問あった。

B アクセント (8点：解答数4)

単語のアクセントのある箇所を問う問題。昨年度と同様、今年度も2、3、4音節の語が出題された。例年通り、アクセントのある個所に惑わされやすい語 (advance [問1], deposit, register [問2], championship, supermarket [問4]) も複数出題された。個々の語の正確なアクセントが問われる。

<第2問>

形式と問題数は昨年度と同じだが、Cの1問あたりの配点が1点増えた。

A 語彙、語法、文法 (20点：解答数10)

語彙、イディオム、動詞の用法等を判断する問題。時制の問題 ([問5]) は頻出である。イディオムやコロケーションの力を併せて要求する問題 (quit + ~ing [問3], see + O + ~ing [問8]) も多い。関係代名詞 ([問6])、形容詞 ([問1]) や副詞 (句) ([問2] [問7])、前置詞 ([問4])、不可算名詞や接続語等の幅広い知識も合わせ持っておきたい。

B 語句整序 (12点：問数3、解答数6)

各文の中に含まれる語彙・語法を用い、意味の通る文にする問題。動詞の用法 (get to ~ [問1], give + O + to + ~ [問3]) は必出である。仮定法や付帯状況、比較等の文法事項も併せて確認しておきたい。

C 応答文完成 (15点：解答数3)

与えられた語句を組み合わせ、対話に即した文にする問題。文法や語法の知識だけでなく、Really? [問1]、I agree. [問3]等のせりふにも注意をし、対話の流れを考える運用力も問われる。

<第3問>

昨年度Aの対話文完成問題がなくなった。今年度A、B(昨年度B、C)の形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A 不要文選択 (15点：解答数3)

パラグラフのまとまりをよくするために取り除いた方がよい文を1つ選ぶ問題。第1文や最終文からキーワードを読み取る (tomato, vegetable, fruit [問2]、insects, food [問3])。取り除く文にもキーワードが含まれている場合もあるため、前後の文との関連性に気をつけ、主題から外れない読み方を心がけたい。

B 発言の意図の要約 (18点：解答数3)

発言の要旨、及び議論全体の要旨を選ぶ問題。ある事柄を別の表現で言い換える (people working hard and achieving their goalsをpeople achieving successで [空欄30]) ことが多い。また、[空欄32]は、直前にit sounds like everyone is saying thatとあるので、全員に共通する考えが入る。個人の意見と全体の話の進み方の両方を読み取る柔軟な読解力が求められる。

<第4問>

形式は昨年度と同じだが、Bの設問が1つ増え、その分、Bの配点が5点増えた。

A グラフ読み取り問題 (20点：解答数4)

グラフを参考に、展開される論からの確かな情報を得る力を問う問題。本文で与えられた情報を順次グラフに当てはめていく。グラフはあくまでも補助的なものであり、説明文を正確に読めるかが問われる。First, Next, Third, 等順番を表す語や、This (第3段落) が指す内容をつかみ、However, Therefore (第5段落) 等、文と文の関係を示す語 (句) で、論理の流れを正確に押さえない。最終段落に続く話題を考へさせる問題 [問4] も昨年度に引き続き出題された。

B 広告読み取り問題 (20点：解答数4)

広告から適切な情報を読み取る問題。設問を読み、与えられた条件をもとに、合致する情報がどこにあるのかを探し出していく。問いに関する情報は上か

ら順に出てくるわけではないので、設問の求める情報がある箇所 (複数の情報を合わせる場合もある) を的確につかむことが大切である。

<第5問> (30点：解答数5)

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。題材は日誌の抜粋であった (昨年度は物語)。

5W1Hをきちんととらえて筋を追う。日誌は時系列で書かれているが、書き手が地球外の生物であることは、後半にならないとわからない。柔軟な思考を持ち、話の中で何を一番伝えたいのかを深く読み込んでいく。

<第6問> (36点：問数6、解答数9)

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

各段落の内容を正確に読み取り、内容を問う設問 (設問A)、段落の要旨を順に並べる設問 (設問B) の2本立て。各段落のポイントをつかみ、話がどのように展開し、主題は何か、という広くかつ深い読解力が求められる。また、ここでも、正解の選択肢は本文で使われていない単語や表現で言い換えてある場合も多い。

3. 昨年度から変化のあった点

- ①第1問Aで、母音2問、子音1問の出題となった (昨年度は母音1問、子音2問)。
- ②第1問Aで、下線部のスペリングが4つとも異なる語の出題があった。
- ③第3問Aの対話文完成問題がなくなったが、第2問Cの対話数が4~5つに増えた (昨年度は2つ)。
- ④第4問Bで設問が1問増えた。
- ⑤第4問Bで、計算する設問が出題された (一昨年度まではあったが、昨年度はなかった)。
- ⑥第5問で、下線部の語の意味を問う設問が出題された (昨年度は下線部の理由)。

4. 日頃の学習で大切なこと**①多面的に語彙を増やす**

ただ単に単語の1つの意味だけを覚えるというのではなく、英語での定義、反意語、同義語、接頭辞・接尾辞、品詞の転換、自動詞・他動詞等、語彙を様々な方法で多面的に増やしたい。語彙に関連性を持たせると、未知の語に遭遇したときにも想像力を働かせ

てなんとか意味がつかめるようになる。カタカナになっている語の英語と日本語の意味の差異や発音・アクセントに注意して覚えるのも1つの方法であろう。

②語と語のつながり（語法、Collocation）に関心を持つ

ある単語を頭に入れる際、その語がどのような語と一緒に使われる場合が多いのか、英語としての語と語の自然なつながりに気を配る習慣を身につけておきたい。単独だとイメージしにくかったり、覚えにくいような単語も、自分が理解しやすい組み合わせなら、より効率的に覚えらる。

③英語を聞き、自ら口にする

音読を通じ、アクセント・強勢・構文（主語と述語の区切れや省略等）に注意を払って日頃から英語を聞く。単語一つひとつの音に注意を払い、そして文全体の内容を理解しながら読み進む。何回も繰り返して読み込んでゆけば、なによりも英語の音に対する興味・関心が増し、同時にリスニングの力もつく。

④場面や内容のイメージをつかむ

会話の応答を考える場合（第2問C）、その会話が行われている時、場所、状況等をイメージする力が求められる。また、例年第5問で出題された物語文

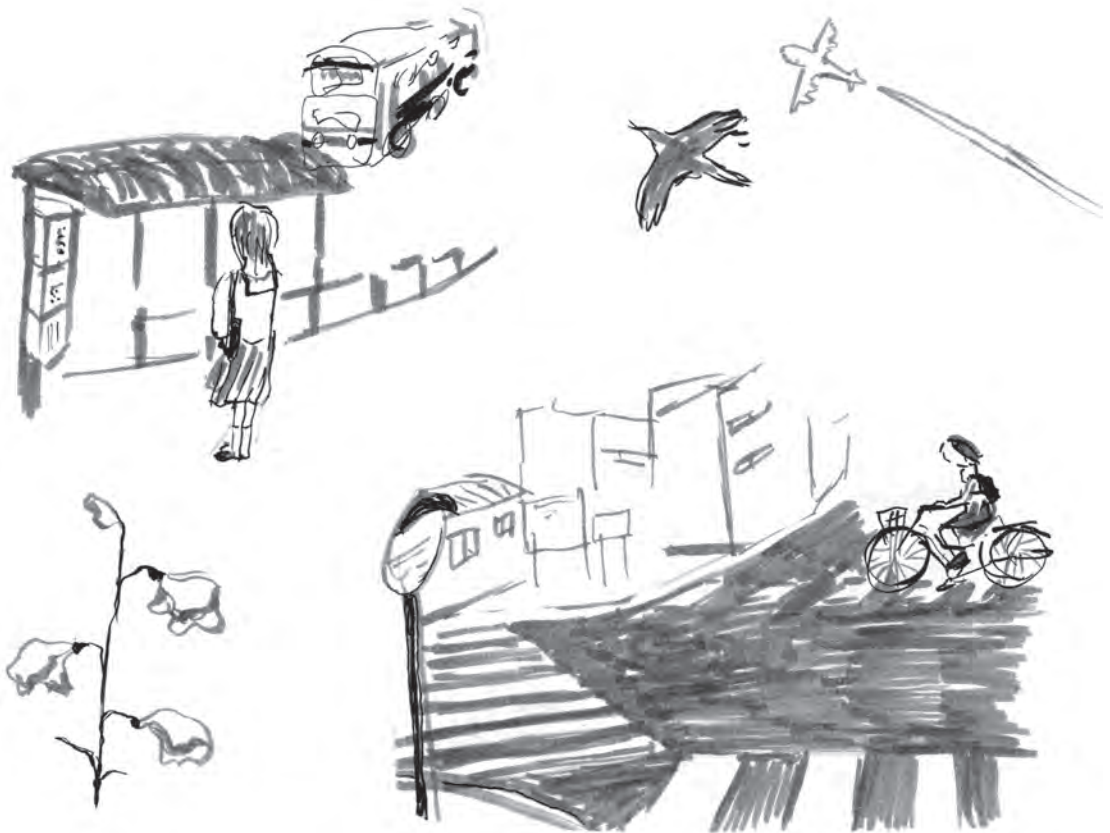
が今年度は日誌の抜粋の形になったが、話の流れをつかんだ上で、想像力を働かせて行間を読み取り、何を伝えようとしているのかを読み込むことも大切である。

⑤わからない語があっても、前後関係からその意味を類推する習慣をつける

センター試験では語彙に関する知識が求められる。とはいえ、意味のわからない語は必ず出てくると覚悟しよう。すべての単語の意味がわからなくても主旨は理解できる、と余裕を持って文章を読み進めたい。未知語に出会うとすぐに辞書で意味を調べる読み方をしていると、類推力や想像力が身につかなくなってしまう。

⑥論理展開を重視した読解力を養う

どんな読み物でも最後まで通して読み、論全体の展開がどのようなになっているかをパラグラフ中心に考える。接続語を手掛かりに、パラグラフがどのように構成されているか全体の論調を捉え、各パラグラフのキーセンテンスを探し、要旨をまとめる。「木を見て森を見ず」にならない大局的な読み方を心がけたい。



リスニング

1. 全体的な傾向

出題形式、解答数、配点は昨年度と同じである。読まれる総語数(1100語強)は昨年度とほぼ同じ。読み上げ速度は昨年度とほぼ同じで自然な感じであるが、音声面でのリダクションもあり、聞き取りにくい箇所もあったと思われる。問題音声も設問ごとに2回流された。平均点は22.67と、過去5年間で一番低かった昨年度の28.11を下回った。内容はいつでも生徒の日常生活や学校生活の中で起きうる身近な話題がテーマになっている。

2. 具体的内容分析

<第1問>対話ビジュアル(12点;解答数6)

❖男女の対話を聞き、適切なイラスト、数字、単語、文を選択する

❖各対話の総語数:30語前後

イラストを選ぶ問題は1問になり、グラフも1問出題された。数値を聞き取って簡単な計算をする問題は昨年度と同じ2問である。最初のせりふで状況をつかみ、2番目~4番目のせりふのキーワードを聞き逃さないようにする。split the rest [問2]、out of stock [問4]、on the rise [問6]等、聞き取りにくい語句も含まれ、細部まで集中して聞く必要がある。By the way, [問1]、as well、and then [問2]、How's ~?, Still, [問3]等、日常会話でよく使われるフレーズにも慣れておきたい。

<第2問>対話応答補充(14点;解答数7)

❖男女の対話を聞き、最後の発言に対する相手の応答を選択する

❖各対話の語数:約20~30語

問7

Woman: Ah, Marcos, there you are.

Man: I just came back from the store.

Woman: Did you get everything? How about the batteries?

選択肢

- ① Oh, I forgot to go shopping.
- ② Oh, you should've reminded me. (正解)
- ③ Sure, anything but batteries.

④ Sure, the shop by the station.

疑問文で終わる対話の設問が2問あった(昨年度と同じ)。最初の2つのせりふから、会話の場面や状況を想像できるようにしたい。ここでも、No, not yet. [問8]、I'm kind of ~ [問9]、how was ~? [問12]等日常会話で使われるフレーズが頻出する。

<第3問A>対話内容Qs & As(6点;解答数3)

❖男女の対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する

❖各対話の総語数:約50語

問15

Man: How many books can I borrow from the library?

Woman: Up to four at a time.

Man: For how long?

Woman: Two weeks, but you can extend the period a week at a time if no one has requested the book.

Man: Can I do it online?

Woman: Sure, but only once for online extensions.

質問: How long can a person extend online?

選択肢

- ① One week (正解)
- ② Two weeks
- ③ Three weeks
- ④ Four weeks

質問の答えを対話から探す。せりふの数は6つ。事前に選択肢に目を通し、場面が想像できると余裕ができる。対話を最後まで聞き、状況や流れの変化をきちんととらえる。話者が相手に同意しているのかそうでないのかといった話の流れをつかむ力とともに、話者の意図を正確に把握する力も求められる。

<第3問B>対話長文内容Qs & As + ビジュアル(6点;解答数3)

❖長めの対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する。

❖対話の総語数:約150語

聞き得た情報をもとに質問に答えていく。多く出てくる情報の中から、何について話しているか、相手はどう反応しているか、指示代名詞が何を指すのか等を考えながら、求められている情報を確実に押

さえたい。

<第4問A>

説明文内容 Qs & As (6点; 解答数3)

❖ 説明文を聞き、その内容についての質問を読み、
答えを選択する

❖ 説明文の総語数: 約200語

1回目と2回目の読み上げの間に約15秒のポーズがある。情報が出揃った段階で各問の答えを絞り、2回目は確認の作業に当てたい。質問文から事前に推測した状況をもとに、出てきた情報を一つ一つ積み重ねてゆき、話の流れに沿って順に問題に当たってゆく。話の流れが変わったり、固有名詞が出てくる場合もあるので、メモを取りながら質問されるポイントの個所を絞って聞くことが大切である。選択肢では、答えとなる語を別の表現で言い換えたり (it had to be done before everyone else got up だから waking up early に)、まとめる場合も多いので、要点をつかむ力も求められる。

<第4問B> 会話長文内容 Qs & As (6点; 解答数3)

❖ 3人の会話を聞き、その内容についての質問を読み、
答えを選択する。

❖ 会話文の語数: 約300語

1回目と2回目の読み上げの間に約40秒のポーズがある。問題冊子に書かれている会話の場面と質問文に目を通し、事前にどれだけの状況を想定できるかがポイント。あとは一人ひとりの主張する内容を総合的に理解する力 (共通点や相違点) と、求められた情報を正確に取り出す力が必要である。ここでも、選択肢では答えとなる箇所が別の表現で言い換えられていることがある。

3. 対応のポイント

① 状況・場面を想像し、話の流れをつかむ

事前に問題指示文、選択肢、イラスト、状況説明文等に目を通し、内容を予測してから英語を聞く。複数の方法が提示され、途中で展開が変わり、最初に出てきた情報が最後まで同じとは限らない。方向性を予測した上で、最後まで丁寧に流れを確認したい。

② 英語特有の表現に慣れる

話の展開がつかめれば自然に聞くことができるが、会話に特有のフレーズは、聞けるだけでなく、意味が自然に頭に入るまで聞き慣れておくようにし

ておきたい。

③ 言い換えの表現を読み取る

リスニングと言っても、選択肢を読み取る力は筆記試験同様に要求される。聞き取る英語の表現がそのまま選択肢に入っているとは限らなく、別の形で言い換えてある場合も多くある。正答の鍵となる情報をきちんと整理する力もつけておきたい。

4. 日頃の学習で大切なこと

① 英語の音を聞き、その音を口にする活動を習慣にする

「継続は力なり」と言われるように、1日5分間でも英語を聞き続けることが大切である。様々なメディアを使って英語の音やリズムを継続的に耳に入れておくことを習慣とし、その音を真似して口に出す活動を続ける。次第に英文の流れが、意味を伴った内容となって頭に残ることになるであろう。

② 聞いた内容を論理的に組み立て、考える力を育てる

リスニング力をつけるには、聞いた音を頭の中で論理的に組み立て直す作業が必要である。教科書等の、ある程度分量がある文章の内容を理解した上で英語を聞いて論の展開をつかむ。そして音読、Qs & As、dictation等の基本練習を日頃から行い、論理的思考力も養っておきたい。

③ 自分のことばで実際に表現する機会を増やす

コミュニケーションを成立させるためには、お互いの考えをきちんと伝え合うことが必要である。相手の伝えたいことを理解し、それに対して自分の意見や考えを、決まりきったパターンではなく、自分のことばで実際に表現する活動を増やしていきたい。



Ohio Weather

法政大学 Brian Wistner

Ohio is part of the Midwestern United States. Even though it looks small in geographic size compared to some states, it has the 7th largest population of the 50 states. One enjoyable point about Ohio that is often overlooked is the weather and how it changes throughout the year—it has four distinct seasons.

The average high temperature in July is 29.6°C. Some days feel hot and humid. However, the average low temperature is 18.3°C, which means the mornings and evenings are usually comfortable. It's hot enough to go swimming in the afternoon, but just right for a brisk morning or evening walk outside.

Compared to Tokyo, it cools off much quicker in autumn in Ohio. The average low temperature in October is 6.7°C. People can be seen wearing multiple layers in the evenings. However, the afternoons are similar to the summer lows with an average of 18.6°C. The weather makes playing and viewing fall sports relatively comfortable.

Winters can be severe. The average high temperature in January is 2.3°C, and the average low is -6.5°C. However, it often gets much colder for even weeks at a time. Heavy snowfalls are common, sometimes resulting in school closings, which the schools call "snow days." If there are too many snow days in an academic year, the schools might have extra classes at



the end of the school year.

When I visited Ohio in the winter of 2014, I observed a rare phenomenon. It had snowed heavily, and a thick covering of snow had formed on the ground. The conditions were just right for snow rollers to form. Snow rollers are created when a thin layer of wet snow rests on top of harder, icy snow. Wind blows the top layer, causing it to roll into interesting shapes. When first observing them, it appears that someone made them, but they form naturally.

Comfortable, pleasant weather returns in the spring, and the flowers begin to bloom. Average temperatures in April are still a bit chilly with a high of 17.2°C and a low of 5.1°C. Compared to the winter weather, however, it feels relatively warm.

These seasons bring variety to life in Ohio throughout the year. Even though seasonal storms can occur, dividing yearly activities among the seasons creates endless opportunities for adventure.

表紙写真
について

リオ・デ・ジャネイロの絶景

法政大学 飯野 厚

2017年7月23日～28日、国際応用言語学会(AILA)のため、ブラジル共和国のリオ・デ・ジャネイロに行く機会を得た。リオは人口600万人を超えるブラジル第2の都市ということもあり、セントロ(中心地区)をはじめとしたオフィス街や繁華街がひしめくメガロポリスである。一方、観光都市としてのリオは、ビーチ、岩山、入り江が織り成す風光明媚な街だった。学会会場はオリンピックの選手村も置かれたという新興地区バーハ・ダ・チジュカ(Barra da Tijuca)にあった。治安も良く、目の前に浅瀬(ポルトガル語のBarra)が続き、美しい砂浜が広がっていた。南半球は真冬だったがリオは亜熱帯気候ゆえ、ビーチで遊ぶ人やスポーツをする人が少なからず見られた。

最終日の午後は、シュガーローフという奇岩の山に登る学会主催のツアーに参加した。その山頂からコパカバーナ、イパネマ、レブロンと世界でも知られた美しいビーチが続く風景が楽しめた。ちなみにオリンピックでも使用されたボサノバの名曲「イパネマの娘」の舞台は、イパネマ海岸を舞台に実在の少女を題材に書かれた曲だそうで、その少女も存命とのこと(ツアーガイドが歌を唄って説明してく

れた)。

この山の反対側は港湾都市リオ市街の入り江が美しかった。正面のはるか先の小高い山の上には巨大なイエスキリストがそびえ立つコロコバードの丘が見えたが、リオの雄大な自然の中では意外と小さく見えた。

街中は近代的な建物が並ぶが、観光都市らしくポルトガル領時代の教会や旧市街が残されている。数年前にポルトガルのリスボンで体験した町並みを彷彿させ、16世紀前後の歴史的情緒が楽しめた。旧市街の一角は昼食を食べるサラリーマンや観光客が道の真ん中にずらりと並んだ長テーブルでおいしそうな肉料理とおしゃべりを楽しんでおり、自分も思わず腰をかけて同じように食事をした。

さて、肝心の学会発表だが、日本とフィリピンのオンライン対話の質的分析を語った私の会場には多くの聴衆はいなかった(遠いアジア地域の実践ゆえか?)。それでも、最前列に座ってくれていたブラジルの教員養成系大学の先生から後日、学生同士のオンライン交流をしたいとの申し出があった。日本に帰国後、早速、ゼミ生にスカイプで交流する課題を行った。学生の若さならはだが、お互いに13時間という時差を越え、地球の裏側とビデオ会議が実現した。英語を母語としない者同士が英語を使ってコミュニケーションする楽しさを体感できたとの感想が聞こえた。遠くまで足を運んだ甲斐があった。

WORKBOOK 4 Skills

- CROWN English Communication New Edition I・II
- MY WAY English Communication New Edition I・II

三省堂編修所 編

平成31年度刊行予定※

各 B5判 128ページ(別冊解答40ページ) 600円(予定)

4技能を育成するためのワークブック!

- 2020年度から始まる4技能型大学入試に対応
- 教科書のLesson毎に4技能のタスクを配置
- タスクに必要な音声はウェブサイトにて提供(無料)



※Ⅲは平成32年度刊行予定。

中学英語 まるまる総復習 BOOK

木村達哉 著
B5判 136ページ 1,000円
(別冊解答・解説 96ページ)

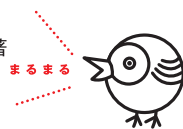


- **単語編** 中学英語のうち重要単語300語を厳選しました。1ユニット60語からなり、全5ユニットで重要単語の定着を図ります。
- **文法編** 中学英語の文法事項を項目ごとに復習します。各文法事項を4技能(読む・聞く・書く・話す)でバランスよく学習できます。
- **長文編** 全4ユニットからなる仕上げの長文読解のパートで、学習後に同じ英文を再度読む「TRY AGAIN」でしっかりと確認ができます。

- 付属品
 - ▶ チェックシート(単語編・文法編)
 - ▶ 確認テスト(長文編) ▶ 本文データ

中学英語 まるまるリスニング BOOK

木村達哉 著



基礎 B5判 104ページ 880円
(別冊解答・解説 24ページ)

標準 B5判 104ページ 880円
(別冊解答・解説 32ページ)

- 付属品
 - ▶ 全スクリプトのテキストデータ
 - ▶ ディクテーションシート
(2種類・データ提供)



三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 ☎03(3230)9411<編集>・9412<営業>

<http://www.sanseido.co.jp/> ※表示価格は本体価格